

# かもめ

ЧАЙКА

——喜劇 四幕——

青空文庫



## 人物

アルカージナ（イリーナ・ニコラーエヴナ） とつぎ先の姓はトレープレヴァ、女優

トレープレフ（コンスタンチン・ガヴリーロヴィチ） その息子、青年

ソーリン（ピョートル・ニコラーエヴィチ） アルカージナの兄

ニーナ（ミハイロヴナ・ザレーチナヤ） 若い処女、裕福な地主の娘

シヤムラーエフ（イリヤー・アフナーシエヴィチ） 退職中尉、ちゆういソーリン家の支配人

ポリーナ（アンドレーエヴナ） その妻

マーシヤ その娘

トリゴリーン（ボリース・アレクセーエヴィチ） 文士

ドールン（エヴゲーニイ・セルゲーエヴィチ） 医師

メドヴェージェエンコ（セミョーン・セミョーノヴィチ） 教員

ヤーコフ 下男

料理人

小間使

ソーリン家の田舎屋敷でのこと。——三幕と四幕のあいだに二年間が経過

## 第一幕

ソーリン家の領地内の廢園の一部。広い並木道が、観客席から庭の奥のほうへ走つて、湖に通じているのだが、家庭劇のため急設された仮舞台にふさがれて、湖はまったく見えない。仮舞台の左右に灌木かんぼくの茂み。椅子いすが数脚、小テーブルが一つ。

日がいま沈んだばかり。幕のおりている仮舞台の上には、ヤークコフほか下男たちがいて、咳せきばらいや槌音つちが聞える。散歩がえりのマーシャとメドヴェージェンコ、左手から登場。

メドヴェージェンコ あなたは、いつ見ても黒い服ですね。どういうわけです？

マーシャ わが人生の喪服なの。あたし、不仕合せな女ですもの。

メドヴェージェンコ なぜです？（考えこんで）わからんですなあ。……あなたは健康

だし、お父さんにしたって金持じやないまでも、暮しに不自由はないし。僕なんか、あ

あなたに比べたら、ずっと生活は辛いですよ。月に二十三ルーブリしか貰ってないのに、そのなかから、退職積立金を天引きされるんですからね。それだって僕は、喪服なんか着ませんぜ。（ふたり腰をおろす）

マーシャ お金のことじゃないの。貧乏人だって、仕合せにはなれるわ。

メドヴェージェンコ そりや、理論ではね。だが実際となると、そうは行かない。僕に、おふくろ、妹がふたり、それに小さい弟——それで月給がただの二十三ルーブリ。まさか食わず飲まずでもいられない。お茶も砂糖もいりますね。タバコもいる。そこでキリキリ舞いになる。

マーシャ （仮舞台のほうを振向いて）もうじき幕があくのね。

メドヴェージェンコ そう。出演はニーナ嬢で、脚本はトレープレフ君の書きおろし。ふたりは恋仲なんだから、今日はふたりの魂が融合して、同じ一つの芸術的イメージを、ひたすら表現しようという寸法でさ。ところが僕とあなたの魂には、共通の接点がない。僕はあなたを想っています。恋しさに家にじつとしていられず、毎日一里半の道を、てくてくやって来ては、また一里半帰っていく。その反対給付といえ、あなたのそっけない顔つきだけです。それも無理はない。僕には財産もなし、家族は大ぜいときてます

からね。食うや食わずの男と、誰が好きこのんで結婚なんかするものか？

マーシャ つまらないことを。(かぎタバコをかく) お気持はありがたいと思うけれど、

それにお応えできないの。それだけのことよ。(タバコ入れを差出して) いかが？

メドヴェージェンコ 欲しくありません。(間)

マーシャ 蒸し蒸しすること。晩おそくなつて、ごろごろザーツときそうね。あなたはしょつ

ちゆう、理屈をこねるか、お金の話か、そのどつちかなのね。あなたに言わせると、貧

乏ほど不合せなものはないみたいだけれど、あたしなんか、ボロを着て乞食こじきぐらしを

したほうが、どんなに気楽だか知れやしないわ。……あなたには、わかつてもらえそう

もないけど……

右手から、ソーリンとトレープレフ登場。

ソーリン (ステッキにもたれながら) わたしはどうも、田舎いなかが苦手でな、この分じやて

つきり、一生この土地には馴染なじめまいよ。ゆうべは十時に床へはいって、けさ九時に目

がさめたが、あんまり寝すぎたもんで、脳みそが頭蓋骨ずがいこつに、べったりくつついたよう

な気がした——とまあいった次第でな（笑う）。ところが昼めしのあとで、ついまた寝こんじまって、今じゃ全身へとへと、夢にうなされてるみたいな気持ちさ、早い話がね……

トレープレフ そりやもちろん、伯父さんは都会に住む人ですよ。（マーシヤとメドヴェエージエンコを見て）皆さん、始まる時には呼びますよ。今ここにいられちゃ困るな。暫<sup>ざんじ</sup>時<sup>んじ</sup>ご退場を願います。

ソーリン （マーシヤに）ちよいとマーシヤさん、あの犬の鎖を解いてやるように、ひとつパパにお願いしてみてはくださらんか。やけに吠<sup>ほ</sup>えるでなあ。おかげで妹は、夜つびてまた寝られなかった。

マーシヤ ご自分で父におつしやつてくださいますし、あたしはご免こうむります。あしからず。（メドヴェエージエンコに）さ、行きましょう！

メドヴェエージエンコ （トレープレフに）じゃ、始まる前に、知らせによこしてください。

ふたり退場。



ソーリン　すると、夜どおしました、吠えられるのか。さあ、事だぞ。わたしは田舎へ来て、思う通りの暮しのできた例ためしがない。前にやよく、二十八日の休暇を取っちゃ、ここへやって来たもんだ。骨休めや何やら——とまあいった次第でな。ところが、くだらんことに責め立てられて、着いたその日から、逃げ出したくなつたよ（笑う）。引揚げる時にや、やれやれと思つたもんだ。……だが今じゃ、役を退ひいてしまつて、ほかに居場所がない——早い話がね。いやでも、ここに釘くぎづけだ……

ヤーコフ　（トレープレフに）若旦那わかだんな、「わつしら」ちよいと一浴びしてきます。

トレープレフ　いいとも。だが十分したら、みんな持ち場に来てくれよ。（時計を見て）もうじき始まりだからな。

ヤーコフ　承知しやした。（退場）

トレープレフ　（仮舞台を見やりながら）さあ、これが僕の劇場だ。カーテン、袖そでが一つ、袖がもう一つ——その先は、がらんだうだ。書割りなんか、一つもない。いきなりパツと、湖と地平線の眺めが開けるんだ。幕あきは、きっかり八時半。ちようど月の出を目がけてやる。

ソーリン　結構だな。

トレープレフ 万二ーナさんが遅刻しようもんなら、舞台効果は吹っ飛んじまう。もうくる時分だがなあ。あのひとは、お父さんやママ母の見張りがきびしいもんで、家を抜け出すのは、牢破りも同様、むずかしいんですよ。（伯父のネクタイを直してやる）伯父さんは、頭も髻ももじやもじやだなあ。ひとつ、刈らせるんですね。……

ソーリン （髻をしごきながら）これで一生、たたられたよ。わたしは若い時分から、飲んだくれそつくりの風采——とまあいった次第でな。ついぞ女にもてた例しがない。（腰かけながら）妹のやつ、なぜああ、おかんむりなんだろう？

トレープレフ なぜかって？ 淋しいんですよ。（ならんで腰をおろしながら）妬けるんです。おつ母さんはてんからもう、この僕にも、今日の芝居にも、僕の脚本にも、反感を持つてるんだ。というのも、演るのが自分じゃなくて、あの二ーナさんだからなんです。僕の脚本も見ない先から、眼の敵にしているんだ。

ソーリン （笑う）まさか、そう気を回さんでも……

トレープレフ おつ母さんはね、この小つぽけな舞台で喝采を浴びるのが、あの二ーナさんで、自分じゃないのが、癪のたねなんですよ。（時計を見て）ちよいと心理的な変り種でね——おつ母さんは。そりや才能もある、頭もいい、小説本を読みながら、めそ

めそ泣くのも得意だし、ネクラーツフの詩だって、即座に残らず暗誦あんしやうできるし、病人の世話をさせたら——エンジェルもはだしですよ。ところが、例しにあの人の前で、エレオノラ・ドウーゼでも褒めてほごらんさい。事ですぜ！褒めるなら、あのひとのことだけでなくてはならん。劇評も、あの人のことだけ書けばいい。『椿姫つばきひめ』だの『人生の毒気』（訳注 ロシア十九世紀の傾向的作家マルケヴィチの戯曲）だのをやる時のあの人の名演技を、わいわい騒ぎ立てたり、感激したりしなくてはならん。ところが、この田舎にや、そういう麻酔剤がない。そこで、淋しいもんだから苛々いらいらする。われわれがみんな悪者で、親のカタキだということになる。おまけに、あの人は御幣ごへいかつぎで、三本蠟燭ろうそく（訳注 死人のほとりを照らす習慣）をこわがる、十三日と聞くと顔いろを変える。しかも、けちんぼときている。オデッサの銀行に、七万も預けてあることは——僕ちゃんと知ってるんだ。だのに、ちよいと貸してとでも言おうもんなら、めそめそ泣きだす始末だ。

ソーリン お前さんは、自分の脚本がおつ母さんの気に入らんものと、頭から決めこんで、しきりにむしゃくしゃ——とまあいった次第だがな。案じることはないさ——おつ母さんは、君を崇拜しているよ。

トレープレフ（小さな花の弁をむしりながら）好き——嫌い、好き——嫌い、好き——嫌い、好き——嫌い。（笑う）そうらね、おつ母さんは僕が嫌いだ。あたり前さ！あの人は生きたい、恋がしたい、派手な着物が着たい。ところがこの僕が、もう二十五にもなるもんだから、おつ母さんは厭でも、自分の年を思い出さざるを得ない。僕がいなけりや、あの人は三十二でいられるが、僕がいると、とたんに四十三になっちまう。だから僕が苦手なんですよ。それにあの人は、僕が劇場否定論者だということも知っている。あの人は劇場が大好きで、あつぱれ自分が、人類だの神聖な芸術だのに、奉仕しているつもりなんだ。ところが僕に言わせると、当世の劇場というやつは、型にはまった因襲にすぎない。この幕があがると、晩がたの照明に照らされた三方壁の部屋のなかで、神聖な芸術の申し子みたいな名優たちが、人間の食ったり飲んだり、惚れたり歩いたり、背広を着たりする有様を、演じてみせる。ところで見物は、そんな俗悪な場面やセリフから、なんとかしてモラルをつかみ出そうと血まなこだ。モラルと言っても、ちつぽけな、手つとり早い、ご家庭にあつて調法——といった代物しろものばかりさ。そいつが手を変え品を変えて、百ペン千ペン、いつ見ても種は一つことの繰返しだ。そいつを見ると僕は、モーパッサンみたいに、ワツと逃げ出すんです。エツフェル塔の俗悪さがやりきれなくなって、命

からがら逃げ出したモーパッサン（訳注 その小説『さすらい』参照）みたいなね。  
 ソーリン 劇場がないじゃ、話になるまい。

トレープレフ だから、新しい形式が必要なんです。新形式がいるんで、もしそれがな  
 いんなら、いつそ何にもないほうがいい。（時計を見る）僕は、おっ母さんが好きです、  
 とても好きです。だが、あの人の生活は、なんぼなんでも酷ひどすぎる。しよっちゅう、あ  
 の小説家のやつとべたべたしちや、のべつ新聞に浮名をながしている。これにやまった  
 く閉口ですよ。時によると、人間の悲しさで、僕だって人なみのエゴイズムが、むらむ  
 らつと起きることもある。つまり、うちのおっ母さんが有名な女優なのが、くやしくな  
 るんです。もし普通の女でいてくれたら、僕もちつとは幸福だったろうにな、つてね。  
 ね伯父さん、これほど情けない、ばかげた境遇があるもんでしようか。おっ母さんの客  
 間には、よく天下のお歴々がずらり顔をならべたもんです——役者とか、文士とかね。  
 そのなかで僕一人だけが、名も何もない雑魚ざごなんだ。同席を許してもらえるのも、僕が  
 あの人の息子むすこだからというだけのこと過ぎん。僕は一体誰だ？ どここの何者だ？ 大  
 学を三年で飛び出した。理由は、新聞や雑誌の社告によくある、例の「さる外部事情の  
 ため」（訳注 当時の雑誌などが、思想の弾圧のため発禁になった時に使う慣用句）つ

て奴やつでさ。しかも、これっばかりの才能もなし、一文だつて金はなし、おまけに旅券にや——キーエフの町人と書いてある。なるほどうちの親父おやじは、有名な役者じゃあつたが、元をただせばキーエフの町人に違ちがいない。といったわけで、おつ母さんの客間で、天下の名優や大作家れんが、仁慈まなこの眼を僕まにそいでくれるごとに、僕はまるで、相手の視線でこつちの小つぽけさ加減を、計はかられてるみたいな気がした、——向うの気持を推量して、肩身の狭い思いをしたもんですよ……

ソーリン 事のついでに、ちよつと聞かしてもらうが、あの小説家は全体何者かね？ どうも得体の知れん男だ。むつつり黙りこんでな。

トレープレフ あれは、頭のいい、さばさばした、それにちよいとその、メランコリックな男ですよ。なかなかりっぱな人物でさ。まだ四十には間まがあるのに、その名は天下にとどろいて、何から何まで結構けいこうずくめのご身分だ。……書くものはどうかと言うと……さあ、なんと言つたらいいかなあ？ 人好きのする才筆じゃあるけれど……が、しかし……トルストイやゾラが出たあと、トリゴーリンを読む気にやどうもね。

ソーリン ところでわたしは、文士というものが好きでな。むかしはこれでも、あこがれの的が二つあつた。女房をもらうことと、文士になることなんだが、どっちも結局だめ

だったな。そう。小つちやな文士だつても、なれりや面白かろうて、早い話がな。

トレープレフ（耳をすます）足音が聞える。……（伯父を抱いて）僕は、あの人なしじ

や生きられない。……あの足音までがすばらしい。……僕は、めちやめちやに幸福だ！

（足早に、ニーナを迎えに行く。彼女登場）さあ、可愛い魔女が来た、僕の夢が……

ニーナ（興奮のていで）あたし、遅れなかったわね。……ね、遅れやしないでしょう。

……

トレープレフ（女の両手にキスしながら）ええ、大丈夫、大丈夫……

ニーナ 一日じゆう心配だつた、どきどきするくらい！ 父が出してはくれまいと、気が

気じゃなかったわ。……でも父は、今しがた継母ははといっしよに出かけたの。空が赤くつ

て、月がもう出そうでしょう。で、あたし、一生けんめい馬を追い立てて来たの。（笑

う）でも、嬉しいわ。（ソーリンの手を握りしめる）

ソーリン（笑つて）どうやらお目を、泣きはらしてござる。……ほらほら！ 悪い子だ

！

ニーナ ううん、ちよつと。……だつて、ほら、こんなに息がはずんでるんですもの。三

十分したら、あたし帰るわ、大急ぎなの。後生だから引きとめないでね。ここへ来たこ

と、父には内緒なの。

トレープレフ　ほんとに、もう始める時刻だ。みんなを呼んでこなくちや。

ソーリン　では、わたしがちよつくら、とまあいった次第でな。はいはい、ただ今。（右手へ行きながら歌う）「フランスをさして帰る、兵士のふたりづれ」（訳注　ハイネの『ふたりの擲弾兵』より）……（振返つて）いつぞや、まあこういった具合に歌いだしたらな、ある検事補のやつめが、こう言いおつた——「いや閣下、なかなか大した喉ですな」……そこで先生、ちよいと考えて、こう付け足したよ——「しかし……厭いやなお声で」（笑つて退場）

ニーナ　父も継母ははも、あたしがここへくるのは反対なの。ここは、ボヘミアンの巢窟そうくつだつて……あたしが女優にでもなりやしまいかと、心配なのね。でもあたしは、ここの湖うみに惹ひきつけられるの、かもめみたいだね。……胸のなかは、あなたのことでいっぱい。

（あたりを見回す）

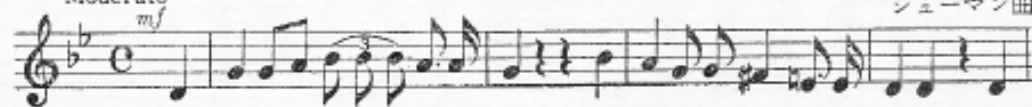
トレープレフ　僕たちきりですよ。

ニーナ　誰かいるみたいだわ……



Moderato  
*mf*

シューマン曲



ふ らんすをさしてかえ る へ いしのふ たりづれ …

トレープレフ いやしない。(接吻)

ニーナ これ、なんの木？

トレープレフ にれの木。

ニーナ どうして、あんなに黒いのかしら？

トレープレフ もう晩だから、物がみんな黒く見えるのです。そう急いで帰らないでください、後生だから。

ニーナ だめよ。

トレープレフ じゃ、僕のほうから行ったらどう、ニーナ？ 僕は夜どおし庭に立って、

あなたの部屋の窓を見てるんだ。

ニーナ だめ、番人にみつかるわ。それにトレゾール《うちのいぬ》は、まだお馴染じやないから、きつと吠えてよ。

トレープレフ 僕は君が好きだ。

ニーナ シーツ。

トレープレフ (足音を耳にして) 誰だ？ ヤーコフ、お前か？

ヤーコフ (仮舞台のかげで) へえ、さようで。

トレープレフ みんな持ち場についてくれ。時刻だ。月は出たかい？

ヤーコフ へえ、さようで。

トレープレフ アルコールの用意はいいね？ 硫黄いおうもあるね？ 紅い目玉が出たら、硫黄

の臭においをさせるんだ。（ニーナに）さ、いらつしやい、支度はすっかりできています。

……興奮あがってますね？……

ニーナ ええ、とても。あなたのママは——平気ですわ、こわくなんかない。でも、トリ  
ゴーリンが来てるでしょう。……あの人の前で芝居をするのは、あたしこわいの、恥ず  
かしいの。……有名な作家ですもの。……若いかた？

トレープレフ ええ。

ニーナ あの人の小説、すばらしいわ！

トレープレフ （冷やかに）知らないな、読んでないから。

ニーナ あなたの戯曲、なんだか演やりにくいわ。生きた人間がないんだもの。

トレープレフ 生きた人間か！ 人生を描くには、あるがままでもいいけない、かくあるベ  
き姿でもいいけない。自由な空想にあらわれる形でなくちゃ。

ニーナ あなたの戯曲は、動きが少なくて、読むだけなんですもの。戯曲というものは、

やっぱり恋愛がなくちゃいけないと、あたしは思うわ……（ふたり、仮舞台のかげへ去る）

ポリーナとドールン登場。

ポリーナ しめっぽくなってきたわ。引返して、オーバーシューズをはいてらしたら？

ドールン 僕は暑いんです。

ポリーナ それが、医者の不養生よ。頑固がんこというものよ。職掌がくがら、しめっぽい空気がご自分に毒なことぐらい、百も承知でいらっしやるくせに、まだ私をやきもきさせたいのねえ。ゆうべだって、わざと一晩じゆう、テラスに出てらしたり……

ドールン （口ずさむ）「言うなかれ、君、青春を失いしと」（訳注 ネクラーフの詩の一節）

ポリーナ あなたは、アルカージナさんと話に身が入りすぎて……つい寒いのも忘れてらしたのね。白状なさい、あのひと、お好きなのね……

ドールン 僕は五十五ですよ。

ポリーナ そんなこと——男の場合、年寄りのうちに、はいらないわ。まだそのとおりの男前なんだから、結構おんなに持てますわ。

ドールン そこで、どうしろとおっしゃる？

ポリーナ 相手が女優さんだと、いつだって平蜘蛛ぐもみたい。いつだってね！

ドールン (口ずさむ) 「われふたたび、おんみの前に、恍惚こうこつとして立つ」(訳注 ネクラースフの詩の一節) ……よしんば世間が、役者をひいきにして、商人なんかと別扱いにするとしても、まあ理の当然ですな。それが——理想主義というもので。

ポリーナ 女のひとが、いつもあなたに惚れこんで、首っ玉にぶらさがってきた。これもその、理想主義ですの？

ドールン (肩をすくめて) へえね？ 婦人がたは、結構僕を尊重してくれましたよ。それも主として、腕のいい医者としてでしたな。十年、十五年まえには、ご承知のとおりこの僕も、郡内でたった一人の、産科医らしい産科医でしたからね。それに僕は、実直な男だったし。

ポリーナ (男の手をとらえる) ねえ、あなた！

ドールン シツ、ひとが来ます。

アルカージナがソーリンと腕を組んで、つづいてトリゴーリン、シヤムラーエフ、メドヴェーージェンコ、マーシヤが登場。

シヤムラーエフ 「一八」七三年のポルタヴァの定期市ちで、あの女優はすばらしい芸を見せましたつけ。ただ驚嘆の一語に尽きます！ 名人芸でしたな！ それから、これも次ついで手に伺いいたいですが、喜劇役者のチャージン——あのパーヴェル・セミヨーヌイチですが、あれはどこにいますかな？ ラスプリューエフ（訳注 スホーヴォ・コブイリンの喜劇『クレチンスキイの結婚』中の人物）を演やらせたら天下無類でね、サドーフスキイ（訳注 モスクワ小劇場の名優、一八七二年死）より上でしたな。いやまったくですよ、奥さん。あわれ彼、今いづくにか在る？

アルカージナ あなたはいつも、大昔の人のことばかりお訊ききになるのね。わたしが知るもんですか！（腰をおろす）

シヤムラーエフ （ふーつとため息をして）パーシカ・チャージン！ 今じゃあんな役者はいない。舞台の下落ですな、アルカージナさん！ 昔は亭てい々たいたる大木ぞろいだった

ものだが、今はもう切株ばかりでね。

ドールン いかにも、光輝さんぜんたる名優は少なくなった。だがその代り、中どころの役者は、ずつとよくなつたです。

シヤムラーエフ お説には賛成しかねますな。もつとも、これは趣味の問題で。 *De gustibus aut bene, aut nihil* ですよ。(訳注 この引用句は、ラテンのことわざを二つ、つきまぜたおかしみがある)

トレープレフ、仮舞台のかげから登場。

アルカージナ (息子に) ねえ、うちの坊っちゃん、一体いつ幕があくの？

トレープレフ もうすぐです。ざんじご猶予。ゆうよ

アルカージナ (『ハムレット』のセリフで) おお、ハムレット、もう何も言うてたもるな！ そなたの語で初めて見たこの魂のむさくろしき。何ほうしても落ちぬ程に、黒々と沁込んだ心の穢れ！ (訳注 第三幕第四場逍遙の訳による)

トレープレフ (『ハムレット』のセリフで) いや、膏ぎった汗臭い臥床に寝びたり、豕いのこ

同然の彼奴あいつと睦言むつごと……（訳注 おなじく。ただしこのくだり、チエーホフはかなり上品に言い直されたロシア訳を踏襲している。いま訳者は、シェイクスピアの原意に近い逍遥訳を採った）

仮舞台のかけで角笛の音。

トレープレフ さあ皆さん、始めます。静肅にねがいます。（間）では、まず私から。

（細身の杖つえを突き鳴らし、大声で）おお、なんじら、年ふりし由緒ゆいしよある影たちよ。夜ともなれば、この湖の上をさまよう影たちよ。わたしたちを寝入らせてくれ。そして、

二十万のちの有様を、夢に見させてくれ！

ソーリン 二十万したら、なんにもないさ。

トレープレフ だから、そのないところを見させるんですよ。

アルカージナ どうともご随意に。わたしたちは寝るから。

幕があがって、湖の景がひらける。月は地平線をはなれ、水に反映している。大き



な岩の上に、全身白衣のニーナが坐っている。

ニーナ 人も、ライオンも、鷺も、雷鳥も、角を生やした鹿も、鷺鳥も、蜘蛛も、水に棲む無言の魚も、海に棲むヒトデも、人の眼に見えなかった微生物も、——つまりは一切の生き物、生きとし生けるものは、悲しい循環をおえて、消え失せた。……もう、何千世紀というもの、地球は一つとして生き物に乗せず、あの哀れな月だけが、むなしく灯火をともしている。今は牧場に、寝ざめの鶴の啼く音も絶えた。菩提樹の林に、こがね虫の音ずれもない。寒い、寒い、寒い。うつろだ、うつろだ、うつろだ。不気味だ、不気味だ、不気味だ。(間) あらゆる生き物のからだは、灰となって消え失せた。永遠の物質が、それを石に、水に、雲に、変えてしまったが、生き物の霊魂だけは、溶け合わさって一つになった。世界に遍在する一つの霊魂——それがわたしだ……このわたしだ。……わたしの中には、アレクサンドル大王の魂もある。シーザーのも、シエイクスピアのも、ナポレオンのも、最後に生き残った蛭のたましいも、のこらずあるのだ。わたしの中には、人間の意識が、動物の本能と溶け合っている。で、わたしは、何もかも、残らずみんな、覚えている。わたしは一つ一つの生活を、また新しく生き直している。

鬼火があらわれる。

アルカージナ（小声で）なんだかデカダンじみてるね。

トレープレフ（哀願に非難をまじえて）お母さん！

ニーナ わたしは孤独だ。百年に一度、わたしは口をあけて物を言う。そしてわたしの声は、この空虚うつろのなかに、わびしくひびくが、誰ひとり聞く者はない。……お前たち、青い鬼火も、聞いてはくれない。……夜あけ前、沼の毒気から生れたお前たちは、朝日のさすまでさまよい歩くが、思想もなければ意志もない、生命のそよぎもありはしない。お前のなかに、命の目ざめるのを恐れて、永遠の物質の父なる悪魔は、分秒の休みもなしに、石や水のなかと同じく、お前のなかにも、原子の入れ換えをしている。だからお前は、絶えず流転るてんをかさねている。宇宙のなかで、常住不変のものがあれば、それはただ靈魂だけだ。（間）うつろな深い井戸へ投げこまれた囚とらわれびとのように、わたしは居場所も知らず、行く末のことも知らない。わたしにわかっているのは、ただ、物質の力の本源たる悪魔を相手の、たゆまぬ激しい戦いで、結局わたしが勝つことになって、やがて物質と靈魂とが美しい調和のなかに溶け合わさって、世界を統すべる一つの意志の

王国が出現する、ということだけだ。しかもそれは、千年また千年と、永い永い歳つきが次第に流れて、あの月も、きららかなシリウスも、この地球も、すべて塵と化したあとのことだ。……その時がくるまでは、怖ろしいことばかりだ。……（間。湖の奥に、<sup>あか</sup>紅い点が二つあらわれる）そら、やって来た、わたしの強敵が、悪魔が。見るも怖ろしい、あの火のような二つの目……

アルカージナ 硫黄の臭い<sup>にお</sup>がするわね。こんな必要があるの？

トレープレフ ええ。

アルカージナ （笑って）なるほど、効果だね。

トレープレフ お母さん！

ニーナ 人間がいないので、退屈なのだ……

ポリーナ （ドールンに）まあまあ、帽子をぬいで！ さあさ、おかぶりなさい、風邪<sup>かぜ</sup>を引きますよ。

アルカージナ それはね、ドクトルが、永遠の物質の父なる悪魔に、脱帽なすつたのさ。

トレープレフ （カツとなって、大声で）芝居はやめだ！ 沢山だ！ 幕をおろせ！

アルカージナ お前、何を怒るのさ？

トレープレフ 沢山です！ 幕だ！ 幕をおろせつたら！ （とんと足ぶみして）幕だ！

（幕おける）失礼しました！ 芝居を書いたり、上演したりするのは、少数の選ばれた人たちのすることだということを、つい忘れていたもんで。僕はひとの畠はたけを荒したんだ！ 僕が……いや、僕なんか……（まだ何か言いたいが、片手を振って、左手へ退場）

アルカージナ どうしたんだろう、あの子は？  
ソーリン なあ、おつ母さん、こりやいけないよ。若い者の自尊心は、大事にしてやらなけりや。

アルカージナ わたし、あの子に何を言ったかしら？

ソーリン だって、恥をかかしたじやないか。

アルカージナ あの子は、これはほんの茶番劇でと、自分で前触れしていましたよ。だからこつちも、茶番のつもりでいたんだけれど。

ソーリン まあさ、それにしたつて……

アルカージナ ところが、いざ蓋ふたをあけてみたら、大層な力作だったわけなのね！ やれやれ！ あの子が、今夜の芝居を仕組んで、硫黄の臭いをぷんぷんさせたのも、茶番どころか、一大デモンストレーションだった。……あの子はわたしたちに、戯曲の作り方

や演<sup>や</sup>り方を、教えてくれる気だったんだわ。早い話が、ま、うんざりしますよ。何かといえ、一々わたしに突つかかったり、当てこすつたり、そりやまあの子の勝手だけれど、これじゃ誰にしたってオクビが出るでしょうよ！ わがままな、自惚<sup>うぬぼ</sup>れの強い子だこと。

ソーリン あの子は、お前のつれづれを慰めようと思つたんだよ。

アルカージナ おや、そう？ そんなら、何か当り前の芝居を出せばいいのに、なぜ選<sup>よ</sup>りに選つて、あんなデカダンのタワ言を聴<sup>き</sup>かせようとしたんだらう。茶番のつもりなら、タワ言でもなんでも聴いてやりましょうけれど、あれじゃ野心満々、——芸術に新形式をもたらそうとか、一新紀元を画そうとか、大した意気ごみやありませんか。わたしに言わせれば、あんなもの、新形式でもなんでもありやしない。ただ根性まがりなだけですよ。

トリゴーリン 人間誰しも、書きたいことを、書けるように書く。

アルカージナ そんなら勝手に、書きたいことを、書けるように書くがいいわ。ただ、わたしには、さわらずにおいてもらいたいのよ。

ドールン ジュピターよ、なんじは怒<sup>いか</sup>れり、か……（訳注 つづいて「されば非はなんじ

にあり」というラテンのことわざ。ドールンはこの句で、暗にアルカージナを諷したの  
であろうが、彼女は気づかずに――)

アルカージナ わたしはジユピターじゃない、女ですよ。(タバコを吸いだす) あたし、  
怒おこつてなんかいません。ただね、若い者があんな退屈な暇つぶしをしているのが、齒が  
ゆいだけです。あの子に恥をかかすつもりはなかったの。

メドヴェージエンコ 何がなんでも、靈魂と物質を区別する根拠はないです。そもそも靈  
魂にしてからが、物質の原子の集合なのかも知れんですからね。(語気をつよめて、ト  
リゴーリンに) で一つ、どうでしょう、われわれ教員仲間がどんな暮しをしているか――  
――それをひとつ戯曲に書いて、舞台上演してみたら。辛いつらいです、じつに辛い生活です！  
アルカージナ ごもつともね。でももう、戯曲や原子のはなしは、やめにしましょうよ。  
こんな好こい晩なんでもの！ 聞きえて、ほら、歌うつてるのが？ (耳をすます) いいわ、  
とても！

ポリーナ 向う岸ですわ。(間)

アルカージナ (トリゴーリンに) ここへお掛けなさいな。十年か十五年まえ、この湖じ  
や、音楽や合唱がほとんど毎晩、ひっきりなしに聞きえたものですわ。この岸ぞいに、地

主屋敷が六つもあつてね。忘れもしない、にぎやかな笑い声、ざわめき、猟銃のひびき、それにしよつちゆう、ロマンスまたロマンスでね。……そのころ、その六つの屋敷の花ジュ  
ユヌ・ブルミエ

形 で、人気の的だったのは、そら、ご紹介しますわ（ドールンをあごでしゃくつて）——ドクトル・ドールンでしたの。今でもこのとおりの男前ですもの、そのころきたら、それこそ当るべからざる勢いでしたよ。それはそうと、そろそろ気が咎とがめてきた。可哀かわいそうに、なんだつてわたし、うちの坊やに恥をかかしたのかしら？ 心配だわ。（大声で）コースチャ！ せがれや！ コースチャ！

マーシャ あたし行つて、捜してみましよう。

アルカージナ ええ、お願い。

マーシャ （左手へ行く）ほおい！ トレープレフさん！……ほおい！ （退場）

ニーナ （仮舞台のかけから出てきながら）もう続きはないらしいから、あたし出て行つてもいいのね。今晚は！（アルカージナおよびポリーナとキスを交す）

ソーリン ブラボー！ ブラボー！

アルカージナ ブラボー！ ブラボー！ みんなで、感心していたんですよ。それだけの器量と、あんなすばらしい声をしながら、田舎に引つこんでらっしやるなんて罪ですよ。

きつと天分がおありのはずよ。ね、いいこと？ 舞台に立つのは、あなたの義務よ！

ニーナ まあ、あたしの夢もそうなの！（ため息をついて）でも、実現しっこありませんわ。

アルカージナ そんなことあるもんですか。さ、ご紹介しましょう——こちらはトリゴリンさん、ボリース・アレクセーエヴィチ。

ニーナ まあ、うれしい……（どぎまぎして）いつもお作は……

アルカージナ （彼女を自分のそばに坐らせながら）そう固くならないでもいいのよ。有名な人だけれど、気持のさっぱりしたかたですからね。ほら、あちらが却<sup>かえ</sup>つて、あがつてらっしやるわ。

ドールン もう幕をあげてもいいでしょうな、どうも気づまりでいかん。

シヤムラーエフ （大声で）ヤーコフ、ちよつくら一つ、幕をあげてくれんか！（幕あがる）

ニーナ （トリゴリンに）ね、いかが、妙な芝居でしょう？

トリゴリン さっぱりわからなかつたです。しかし、面白く拝見しました。あなたの演技は、じつに真剣でしたね。それに装置も、なかなか結構で。（間）この湖には、魚が



どつきりいるでしょうな。

ニーナ ええ。

トリゴーリン 僕は釣りが好きでしてね。夕方、岸に坐りこんで、じつと浮子うきを見てるほど楽しいことは、ほかにありませんね。

ニーナ でも、いったん創作の楽しみを味わった方には、ほかの楽しみなんか無くなるんじゃないかしら。

アルカージナ (笑い声を立てて) そんなこと言わないほうがいいわ。このかた、ひとり持ちあげられると、尻しりもちをつく癖くせがおりなの。

シャムラーエフ 忘れもしませんが、いつぞやモスクワのオペラ座でね、有名なあのシルヴァ(訳注 イタリアの歌手)が、うんと低いドの音を出したんです。ところがその時、折も折ですな、クレムリンの合唱隊のバスウたいが一人、天井てんじょう敷しきに陣まどって見物してたんですが、とつぜん敷やぶから棒ぼうに、いやどうも驚おどろくまいことか、その天井てんじょう敷しきから、

「ブラボー、シルヴァ！」と、やってのけた——それが完全に一オクターブ低いやつでね。……まず、こんな具合、——(低いバスで)ブラボー、シルヴァ。……満場まんじやうシーンとしてしまいましたよ。(間)

ドールン 静寂しじまの天使とびすぎぬ。(訳注 一座が急にシーンとしたときに言うことば)

ニーナ わたし、行かなくちや。さようなら。

アルカージナ どこへいらつしやるの？ こんなに早くから？ 放しちやあげませんよ。

ニーナ パパが待つてますから。

アルカージナ なんてパパでしょうね、ほんとに……(キスを交す) じゃ、仕方がないわ。お帰しするの、ほんとに残念だけれど。

ニーナ わたしだって、おいとまするの、どんなに辛いかわかりませんわ！

アルカージナ 誰かお送りするといいんだけど、心配よ。

ニーナ (おどおどして) まあそんな、いいんですの！

ソーリン (哀願するように彼女に) もっと、いてくださいよ！

ニーナ 駄目だめなんですの、ソーリンさん。

ソーリン せめて一時間——とまあいった次第でね。いいじゃありませんか、ほんとに……

ニーナ (ちよつと考えて、涙声で) いけませんわ！ (握手して、足早に退場)

アルカージナ 気の毒な娘さんだこと、まったく。人の話だと、あの子の母親が亡なくなる

前、莫<sup>ばくだい</sup>大な財産を一文のこらず、すっかりご主人の名義に書きかえたんですつて。それを今度はあの父親が、後添いの名義にしてしまったもので、今じゃあの子、はだか同然の身の上なのよ。ひどい話ですわ。

ドールン さよう、あの子の親父<sup>おやじ</sup>さんは相当な人でなしでね、一言の弁解の余地もありませんや。

ソーリン (冷えた両手をこすりながら) われわれももう行こうじゃありませんか、皆さん。だいぶじめじめしてきたわい。わたしや、脚<sup>あし</sup>がずきずきする。

アルカージナ あんたの脚は、まるで木で作ったみたい。歩くのもやつとなのね。さ、参りましょう、みじめなお爺<sup>じい</sup>さん。(彼の腕をささえる)

シヤムラーエフ (妻に片手をさしのべて) マダム？

ソーリン ほら、また犬が吠<sup>ほ</sup>えている。(シヤムラーエフに) お願いだが、なあシヤムラーエフさん、あの犬を放してやるように言ってくださらんか。

シヤムラーエフ 駄目ですな、ソーリンさん、穀倉に泥棒がはいると困りますからな。なにしろわたしのキビが納めてあるんでね。(並んで歩いているメドヴェーゲンコに) 完全に一オクターブ低いやつでね、「ブラボー、シルヴァ！」それが君、専門の歌手じ

やなくて、たかが教会の歌うたいなんですからね。

メドヴェージェンコ 給料はどれくらいでしょうかね、クレムリンあたりの歌うたいだと？

ドールンのほか一同退場。

ドールン (ひとり) ひよつとすると、おれは何にもわからんのか、それとも気がちがつたのかも知れんが、とにかくあの芝居は気に入ったよ。あれには、何かがある。あの娘が孤独のことを言いだした時や、やがて悪魔の紅い目玉あかがあらわれた時にや、おれは興奮して手がふるえたつけ。新鮮で、素朴だ。……ほう、先生やって来たらしいぞ。なるべく気の引立つようなことを言つてやりたいものだ。

トレープレフ (登場) もう誰もいない。

ドールン 僕がいます。

トレープレフ 僕を庭じゆう捜しまわってるんだ、あのマーシヤのやつ。やりきれない女だ。

ドールン　ねえトレープレフ君、僕は君の芝居が、すっかり気に入っちゃった。ちよいとこう風変りで、しかも終りのほうは聞かなかったけれど、とにかく印象は強烈ですね。君は天分のある人だ、ずっと続けてやるんですね。

トレープレフはぎゅつと相手の手を握り、いきなり抱きつく。

ドールン　ひゅツ、なんて神経質な。涙をためたりしてき。……僕の言いたいののはね、いいですか——君は抽象観念の世界にテーマを仰いだですね。これは飽くまで正しい。なぜなら、芸術上の作品というものは必ず、何ものか大きな思想を表現すべきものだからです。真剣なものだけが美しい。なんて蒼い顔<sup>あお</sup>してるの！

トレープレフ　じゃあなたは——続けろと言うんですね？

ドールン　そう。……しかしね、重要な、永遠性のあることだけを書くんですな。君も知つてのとおり、僕はこれまでの生涯を、いろいろ変化をつけて、風情<sup>ふせい</sup>を失わずに送ってきた。僕は満足ですよ。だが、まんいち僕が、芸術家が創作にあたって味わうような精神<sup>こうしょう</sup>の昂揚<sup>こうやう</sup>を、ひよつと一度でも味わうことができたとしたら、僕はあえて自分をくる

んでいる物質的な上つ面うわらや、それにくつついて一切を軽蔑けいべつして、この地上からス  
ーツと舞いあがったに相違ないな。

トレープレフ お話中ですが、ニーナさんはどこでしょう？

ドールン それに、もう一つ大事なものは、作品には明瞭めいりょうな、ある決った思想がなければなら  
ばならんということだ。なんのために書くのか、それをちゃんと知っていなければなら  
ん。でなくて、一定の目当てなしに、風景でも賞しながら道を歩いて行ったら、君は迷  
子になるし、われとわが才能で身を滅ぼすことになる。

トレープレフ (じれったそうに) どこにいるんです。ニーナさんは？

ドールン うちへ帰ったですよ。

トレープレフ (絶望的に) ああ、どうしよう？ 僕はあの人に会いたいんだ。……ぜひ  
会わなくちや。これから行ってこよう……

マーシヤ登場。

ドールン (トレープレフに) まあ落着きたまえ、君。

トレープレフ　とにかく行ってきました。行かなくちゃならんです。

マーシャ　うちへおはいりになって、ねトレープレフさん。お母さまがお待ちかねよ。心配してらっしゃるわ。

トレープレフ　そう言ってください、ぼくは出かけたって。君たちみんなも、どうぞ僕をほつといってくれたまえ！　ほつといて！　あとをつけ回さないでさ！

ドールン　まあまあまあ、君……そんな滅茶めっちゃな……いけないなあ。

トレープレフ　（涙声で）さようなら、ドクトル。感謝します……（退場）

ドールン　（ため息をついて）若い、若いなあ！

マーシャ　ほかに言いようがなくなると、みなさんおっしゃるのね——若い、若いって……（かぎタバコをかぐ）

ドールン　（タバコ入れを取上げて、茂みの中へ投げる）けがらわしい！（間）うちの

中では、カルタをやってるらしい。どれ、行くとするか。

マーシャ　ちよつと待って。

ドールン　なんです？

マーシャ　もう一ぺん、あなたに聞いて頂きたいことがあるの。ちよつと聞いて頂きたい

の。……（興奮して）わたし、うちの父は好きじゃないけれど……あなたには、おすがりしていますの。なぜだか知らないけれど、わたし心底から、あなたが親身しんみなかつたのよな気がしますの。……どうぞ助けてください。ね、助けて。さもないとわたし、ばかなことをしたり、自分の生活をおひやかして、滅茶々々にしちまうわ。……もうこれ以上わたし……

ドールン どうしたんです？ 何を助けろと言うんです？

マーシャ わたし辛いつらいんです。誰も、誰ひとり、この辛さがわかってくれないの！（相手の胸に頭を押しあて、小声で）わたし、トレープレフを愛しています。

ドールン なんてみんな神経質なんだ！ なんて神経質なんだ！ それに、どこもかしこも恋ばかしだ。……おお、まどわしの湖よ、だ！（やさしく）だって、この僕に一体、何があげられます、ええ？ 何が？ え、何が？

——幕——



## 第二幕

クロケットのコート。右手奥に、大きなテラスのついた家。左手には湖が見え、太陽が反射してきらきらしている。そこここに花壇。まひる。炎暑。コートの横手、菩提樹ぼだいじゆの老木のかげにベンチが一脚。それにアルカージナ、ドールン、マーシヤひやがかけている。ドールンの膝には、本が開けてある。

アルカージナ (マーシヤに) じゃ、立つてみましょう。(ふたり立ちあがる) こうして並んでね。あんたは二十二、わたしはかれこれその倍よ。ね、ドールンさん、どっちが若く見えて？

ドールン あなたです、もちろん。

アルカージナ そうらね……で、なぜでしょう？ それはね、わたしが働くからよ、物事に感じるからよ、しよっちゆう気を使っているからよ。ところがあんたときたら、いつも一つ所にじつとして、てんで生きちやいない。……それにわたしには、主義があるの

——未来を覗き見しない、というね。わたしは、年のことも死のことも、ついで考えたことがないわ。どうせ、なるようにしかならないんだもの。

マーシャ わたしは、こんな気がしますの——まるで自分が、もうずっと昔から生れてい  
るみたいなの。お儀式用のあの長つたらしいスカートよろしく、自分の生活をずるずる引  
きずつてるみたいなのがね。……生きようなんて気持が、てんでなくなることだってよ  
くありますわ。（腰をおろす）でも、くだらないわね、そんなこと。奮起一番、こんな  
妄念もうねんは叩きたたださなくちゃいけないわ。

ドールン （小声で口ずさむ）「ことづてよ、おお、花々」……（訳注 グーノーの歌劇  
『ファウスト』第三幕、ジューベルの詠唱より）

アルカージナ それにわたしは、イギリス人みたいにキチンとしているわ。わたしはね、  
いいこと、いわばピンと張りつめた気持でね、身なりだって髪かたちだって、いつも  
しやんとして  
Comme il faut いますよ。一あし家うちを出るにしたって、よしんば、ほら、こうして庭へ  
ブルーズ  
出る時でも、——部屋着のまま髪も結わずに、なんてことがあったかしら？ とんでも  
ない。わたしがこうしていつまでも若くていられるのは、そこらの連中みたいにぐうた

ゲーノー曲



ことづてよ、おお、はな - ば な - 。

らな真似まねをしたり、自分を甘やかしたりしなかつたおかけですよ。……（両手を腰にあてて、コートを歩きまわる）ほらね、——ピヨピヨひよ雛ひよつ子よ。十五の小娘にだつてなつて見せるわ。

ドールン　まあまあ、それはそうとして、僕は先を続けますよ。（本を手にとつて）ええと、粉屋ねずみと鼠ねずみのところでしたね。……

アルカージナ　その鼠ねずみのところ。読んでちようだい。（腰かける）でも、貸してごらんなさい、わたしが読むわ。こんどはわたし。（本をうけ取つて、眼でさがす）鼠と……ああここだ。……（読む）「だからもちろん、社交界の婦人たちが小説家をちやほやして、これを身辺へ近づけるがごときは、その危険なること、粉屋ねずみが鼠ねずみを納屋なやに飼つておくのと一般である。にもかかわらず、小説家は依然としてヒイキにされる。かくて、女性がこれぞと思う作家に狙ねらいをつけて、これをサロンに手なずけておこうという段になると、彼女はお世辞、お愛想、お追つい従しょうの限りをつくして包圍攻撃を加える」……ふん、フランスじゃそうかも知れないけれど、このロシアじゃ、そんな目論見もくろみもへつたくれもありやしない。ロシアの女はまず大抵、作家を手に入れる前に、自分のほうが首つたけの大あつあつになつちまう。いやはやだわ。手近なところで、たとえばこのわたしとトリ

ゴーリンだつても……

ソーリンが杖つえにたよりながら登場。ならんでニーナ。そのあとからメドヴェージェ  
ンコが、空つぽの肘ひじかけ椅子いす（訳注 車のついた）を押しってくる。

ソーリン （子供をあやすような調子で）ああ、そうなの？ 嬉うれしくって堪たまらないの？

今日はみんな浮き浮きつてわけかな、早い話が？ （妹に）嬉しいことがあるんだよ！

お父さんと、ままおつ母かさんが、トヴェーリへ行つちまったんで、ぼくたちまる三日  
というもの、のうのうと羽根がのぼせるんだ。

ニーナ （アルカージナの隣に腰かけ、彼女に抱きつく）わたしほんとに幸福！ これで  
もうわたし、あなた方のものですわ。

ソーリン （自分の肘かけ椅子にかける）今日はこの人、じつにきれいだなあ。

アルカージナ おめかしして、ほれぼれするみたい。（ニーナにキスする）でも、あんま  
り褒ほめ立てちゃいけないわ、鬼やが妬やきますからね。トリゴーリンさんはどこ？

ニーナ 水浴び場で、釣りをしてらっしやるの。

アルカージナ よく飽きないものねえ！ （つづけて読もうとする）

ニーナ それ、なんですの？

アルカージナ モーパッサンの『水の上』よ。（二、三行ほど黙読する）ふん、あとはつまらない嘘うそつぱちだ。（本を閉じる）わたし、なんだか気持が落着かない。うちの子は、一体どうしたんでしょうねえ？ どうしてあんなつまらなそうな、けわしい顔つきをしてるんだろう？ あの子はもう何日も、ぶっ続けに湖へばかり行って、わたしおちおち顔を見る時もないの。

マーシャ くさくさしてらっしやるんですわ。（ニーナに向って、おずおずと）ねえ、あの人の戯曲をどこか、読んでくださらない！

ニーナ （肩をすくめて）あら、あれを？ とてもつままないのよ！

マーシャ （感激をおさえながら）あの人が自分で何か朗読なさると、眼が燃えるようにきらきらして、顔が蒼あおざめてくるんですわ。憂うれいをふくんだ、きれいな声で、身のこなしは詩人そっくり。

ソーリンのいびきが聞える。

ドールン　ごゆるりと！

アルカージナ　ねえ、ペトルーシヤ！

ソーリン　ああ？

アルカージナ　寝てらっしやるの？

ソーリン　いいや、どうして。

間。

アルカージナ　あなたは療治をなさらない、いけないわ、兄さん。

ソーリン　療治したいのは山々だが、このドクトルが、してやろうとおっしやらん。

ドールン　六十の療治ですか！

ソーリン　六十になったって、生きたいさ。

ドールン　（吐き出すように）ええ！　じゃ、カノコ草そくの水薬（訳注　カノコ草の根から製した鎮静剤）でもやるですな。

アルカージナ　どこか、温泉にでも行ったらいいんじゃないかしら。

ドールン　ほほう？　行くのもよし、行かないのもまたよしですな。

アルカージナ　ややこしいわね。

ドールン　ややこしいも何も無い。はつきりしてますよ。

間。

メドヴェージェンコ　ソーリンさんは、タバコをやめるべきでしょうな。

ソーリン　くだらん。

ドールン　いや、くだらんどころじやない。酒とタバコは、個性を失わせますよ。シガー

一本、ウオトカ一杯やったあとのあなたは、もはやソーリン氏ではなくて、ソーリン氏プラス誰かしら、なんです。自我がだんだんぼやけて、あなたは自分に対して、あたかも第三者——つまり「彼」に対するような態度になるわけです。

ソーリン　（笑って）あんたは勝手に理屈をならべるがいいさ。人生の盛りを楽しんだ人だからね。ところが僕はどうか？　司法省に二十八年も勤めはしたが、まだ生活をした



ことがない、何一つ味わったことがない、早い話がね。だからさ、生きたくって堪らないのは、わかりきった話じゃないですか。あんたは腹がいっぱい、泰然と構えていなさる。それで哲学に興味をもちなさる。ところが僕は、生きたいものだから、夕食にシエリー〔酒〕をやったり、シガーをふかしたり、とまあいった次第でさ。それだけの事ですよ。

ドールン 命というものは、もつと大事に扱うものです。六十になつて療治をしたり、若い時の楽しみが足りなかつたと悔んだりするのは、失礼ながら軽率というものですよ。

マーシヤ (立ちあがる) もう午食おひるの時間よ、きつと。(だらけた気力のない歩き方をする) 足がしびれたわ。……(退場)

ドールン ああして行つて、午食の前に「ウオトカを」二杯ひっかけるんだ。

ソーリン わが身に仕合せのない娘こだからね、可哀かわいそうに。

ドールン つまらんことを、ええ閣下。

ソーリン そらそれが、腹いっぱい食つた人の理屈さ。

アルカージナ あーあ、およそ退屈いなかといったら、この親愛なる田舎の退屈さに、まさるものなしだわね! 暑くて、静かで、誰もなんにもせず、哲学ばかりやって。……ねえ

皆さん、こうしてごいつしよにいるのもいいし、お話を伺ってるのも楽しいわ。けど……ホテルの部屋に引っこもつて、書き抜きを詰めこむ時のほうが——どんなにましだか知れやしない！

ニーナ（感激して）すばらしいわ！ わたし、わかりますわ。

ソーリン むろん、都会のほうがいいさ。書齋に引っこんでる。取次ぎなしには誰も通しはせん。用事は電話……往來にや辻馬車つじが通る、とまあいった次第でな……

ドールン（口ずさむ）「ことづてよ、おお、花々」……

シヤムラーエフ登場。つづいて、ポリーナ。

シヤムラーエフ ほう、皆さんお揃そろいだ。こんにちは！（アルカージナの手に、つづいてニーナの手に接吻せつぶんする）ご機嫌せつぶんうるわしくて何よりです。家内の話では、あなたのお伴ともをして今日、町へ出かけるそうですが、ほんとでしようか？

アルカージナ ええ、そのつもりなの。

シヤムラーエフ ふむ。……それも結構ですが、しかし何に乗って行かれますかな、奥さ

ま？ 今日はいまを運ぶ日なので、男衆はみんな手がふさがってあります。それに一体、どんな馬を使うおつもりですか、ひとつ伺いたいもんで。

アルカージナ　どんな馬？　知るもんですか——そんなこと！

ソーリン　うちには、よそ行きのやつがあるはずだが。

シヤムラーエフ　（興奮して）よそ行きの？　では、頸輪くびわはどうすればいいのです？　どこから持ってくればよろしいんです？　こりや驚いた！　さつぱりわからん！　ねえ奥

さん！　失礼ながら、わたしはあなたの才能を崇拜して、あなたのためなら、十年の命を投げだすのもしません、しかし馬は絶対ご用だてできません！

アルカージナ　でも、わたしがどうしても出かけなければならぬとしたらどう？　妙な

話だこと！

シヤムラーエフ　奥さん！　あなたはわかっておいでなさん、農家の経営というものが！

アルカージナ　（カツとして）また例の御託ごたくが始まった！　そんならよござんす、わたし今日すぐモスクワへ帰るから。村へ行って、馬をやとってくるようお願いしてください。それも駄目なら、駅まで歩いて行きます！

シヤムラーエフ（カッとして）そういうことなら、わたしは辞職します！　べつの支配人をおさがしなさい！（退場）

アルカージナ　毎とし夏になると、こうだわ。毎夏、わたしはここへ来て厭いやな目にあわされるんだわ！　もうここへは足ぶみもしない！（左手へ退場。そこに水浴び場がある）  
所持。やがて、彼女が家に歩いて行くのが見える。そのあとにトリゴーリンが、釣竿つりざおと手桶ておけをさげてつづく）

ソーリン（カッとして）理不尽にもほどがある！　一体なんたることだ！　つくづくもう厭いやになったよ、早い話がな。即刻ここへ、ありったけの馬を出させるがいい！

ニーナ（ポリーナに）アルカージナさんのような、有名な女優さんにさからうなんて！　そのお望みとあれば、たとえ気まぐれにしたって、お宅の経営よりか大切じゃありませんの？　呆あきれて物も言えないわ！

ポリーナ（身も世もあらず）どうしろとおっしゃるの？　わたしの身にもなったちようだい、どうすればいいと仰うしやるの？

ソーリン（ニーナに）さ、妹のところへ行きましょう。……みんなで、あれが発たつて行かないように、頼たんでみましょう。ね、どうです？　（シヤムラーエフの去った方角を

見やつて) まったくやりきれん男だ! 暴君だ!

ニーナ (彼の立とうとするのを遮りながら) 坐つてらっしゃい、坐つて。……わたしたちがお連れしますわ。……(メドヴェーゲンコと二人で椅子を押す) ああ、ほんとに厭だこと!……

ソーリン そう、まったく厭なことだ。……でもね、あの男は出て行きはしない。わたしが今すぐ、話をつけるからね。(三人退場。ドールンとポリーナだけ残る)

ドールン 厄介な連中だなあ。本来なら、あんたのご亭主をポイとおっぱり出せばいいものを、それがとどのつまりは、あの年寄り婆さんみたいなソーリン先生が、妹とふたりがかりで、詫びを入れるのが落ちですよ。まあ見てらっしゃい!

ポリーナ あの人は、よそ行きの馬まで野良へ出したんですの。それに、こんな行き違いは毎日のことなのよ。そのためどれほどわたしが苦勞するか、わかってくださったらねえ! これじゃ病氣になつてしまふわ。ほらね、顫えがついてるわ。……わたし、あの人がさつきには愛想がつきた。(哀願するように) エヴゲーニイ、ね、大事なといしエヴゲーニイ、わたしを引取つてちょうだい。……わたしたちの時は過ぎてゆくわ、おたがいもう若くはないわ。せめて一生のおしまいだけでも、かくれたり、嘘をついた

りせずになりたい……（間）

ドールン 僕は五十五ですよ、今さら生活を変えようたつてもう遅い。

ポリーナ わかつてるわ、そう言つて逃げをお打ちになるのも、わたしのほかに、身近な女の人が、幾らもおありだからよ。みんな引取るわけにはいきませんものね。わかつてますわ。こんなこと言つてご免なさい、もう飽きられてしまったのにな。

ニーナが家のほとりに現われる。彼女は花を摘む。

ドールン そんなばかなことが。

ポリーナ わたし、嫉妬しつとでくるしいのよ。そりや、あなたはお医者さんだから、婦人を避

けるわけにはいかない。それはわかるけれど……

ドールン （近づいて来たニーナに）どうです。あちらの様子は？

ニーナ アルカージナさんは泣いてらっしゃるし、ソーリンさんはまた喘息ぜんそくよ。

ドールン （立ちあがる）どれ行つて、カノコ草の水薬でも、ふたりに飲ませるか。……

ニーナ （彼に花をわたして）どうぞ！

ドールン　こりやどうも《メルシ・ビエン》。(家のほうへ行く)

ポリーナ　(いっしょに行きながら) まあ、可愛らしい花だこと！ (家のほとりで、声を押し殺して) その花をちようだい！ およこしなさいったら！ (花を受けとり、それを引きむしって、わきへ捨てる。ふたり家にはいる)

ニーナ　(ひとり) 有名な女優さんが、それもあんなつまらないことで泣くなんて、どう見ても不思議だわねえ！ もう一つ不思議と言えば、名高い小説家で、世間の人気者で、わいわい新聞に書き立てられたり、写真が売りだされたり、外国で翻訳まで出ている人が、一日じゅう釣りばかりして、ダボハゼが二匹釣れたってにこにこしてるなんて、これも変てこだわ。わたし、有名な人って、そばへも寄れないほどえびりくさって、世間の人間を見くだしているものと思っていた。家柄だの財産だのを、無上のものと崇め奉る世間にたいして、自分の名誉やぱりぱりの名声でもって、仕返しをする気なのだろうと思っていた。ところがどうでしょう、泣いたり、釣りをしたり、カルタをやったり、笑ったり、一向みんなと違やしない。……

トレープレフ　(無帽で登場。猟銃と、かもめの死骸しがいを持つ) 一人つきりなの？

ニーナ　ええ、そう。

トレープレフ、鴉を彼女の足もとに置く。

ニーナ どういうこと、これ？

トレープレフ 今日ぼくは、この鴉を殺すような下劣な真似まねをした。あなたの足もとに捧ささげます。

ニーナ どうかなすつたの？（鴉を持ちあげて、じっと見つめる）

トレープレフ（間をおいて）おっつけ僕も、こんなふうに僕自身を殺すんです。

ニーナ すっかり人が違ったみたい。

トレープレフ ええ、あなたが別人みたいになって以来。あなたの態度は、がらり変ってしまいましたね。目つきまで冷たくなって、僕がいるときも窮屈きうくつそうだ。

ニーナ 近ごろあなたは怒りっぽくなって、何か言うにもはつきりしない、へんな象徴しやうていみたいなものを使うのね。現にこの鴉にしたって、どうやら何かの象徴らしいけれど、ご免なさい、わたしわからないの。……（鴉をベンチの上に置く）わたし単純すぎるものだから、あなたの考えがわからないの。



トレープレフ　ことの起りはね、僕の脚本があんなぶざまな羽目になった、あの晩からなんです。女というものは、失敗を赦ゆるしませんからね。僕はすっかり焼いちまった、切れっぱし一つ残さずにね。僕がどんなにみじめだか、あなたにわかつたらなあ！　あなたが冷たくなったのが、僕は怖おそろしい、あり得べからざることのような気がする。まるで目がさめてみると、この湖がいきなり干あがっていたか、地面へ吸いこまれてしまったいたみたいだ。今しがたあなたは、単純すぎるもんだから僕の考えがわからない、と言いましたね。ああ、なんのわかることがあるもんですか　あの脚本が気に入らない、それで僕のインスピレーションを見くびって、あなたは僕を、そのへんにうようにしている平凡な奴やつらといっしょにしているんだ。……（とんと足ぶみして）わかってるさ、ちゃんと知ってるんだ！　僕は脳みそに、釘くぎをぶちこまれたような気持だ。そんなもの、僕の血をまるで蛇へびみたいに吸って吸って吸いつくす自尊心もろとも、呪のろわれるがいいんだ。……（トリゴーリンが手帳を読みながら来るのを見て）そうら、ほんもの天才がやって来た。歩きつぷりまでハムレットだ、やっぱり本を持ってね。……（嘲ち弄ようろう　口調で）「言葉、ことば、ことば」か……まだあの太陽がそばへこないうちから、あなたはもうにつこりして、目つきまであの光でトロンとしてしまった。邪魔はしませ

んよ。(足早に退場)

トリゴーリン (手帳に書きこみながら) かぎタバコを用い、ウオト力を飲む。……いつも黒服と。教師が恋する……

ニーナ ご機嫌よう、トリゴーリンさん!

トリゴーリン ご機嫌よう。じつは思いがけない事情のため、われわれはどうやら今日発つことになりそうです。あなたとまたいつお会いできるかどうか。いや、残念です。わたしは、ごくたまにしか若いお嬢さん——若くてしかもきれいなお嬢さんに、会う機会がないもので、十八、九の年ごろには一体どんな気持でいるものか、とんと忘れてしまつて、どうもはつきり頭に浮ばんです。だから、わたしの作品に出てくる若い娘たちは、大抵作りものですよ。わたしはせめて一時間でもいいから、あなたと入れ代りになつて、あなたの物の考え方や、全体あなたがどういう人かを、とつくり知りたいたいと思ひますよ。

ニーナ わたしは、ちよいちよいあなたと入れ代りになつてみたいわ。

トリゴーリン なぜね?

ニーナ 有名な、りつぱな作家が、どんな気持でいるものか、知りたいからですわ。有名

って、どんな気がするものかしら？　ご自分が有名だということを、どうお感じになりまして？

トリゴーリン　どうって？　まあ別になんともないでしょうね。そんなこと、ついぞ考えたこともありませんよ。（ちよつと考えて）二つのうち、どっちかですな——わたしの名声をあなたが大げさに考えているか、それとも、名声というものがおよそ実感としてピンとこないかね。

ニーナ　でも、自分のことが新聞に出ているのをご覧になったら？

トリゴーリン　褒められればいい気持だし、やつつけられると、それから二日は不機嫌を感じますね。

ニーナ　すばらしい世界だわ！　どんなにわたし羨ましいか、それがわかってくださつたらねえ！　人の運命って、さまざまなのね。退屈な、人目につかない一生を、やつとこさ曳きずつている、みんな似たりよつたりの、不合せな人たちがいるかと思うと、一方にはあなたのように、——百万人に一人の、面白い、明るい、意義にみちた生活を送るめぐり合せの人もある。あなたはお合せですわ。……

トリゴーリン　わたしがね？　（肩をすくめて）ふむ。……あなたは、名声だの幸福だの、

何かこう明るい面白い生活だのと仰しやるが、わたしにとっては、そんなありがたそう  
な言葉はみんな、失礼ながら、わたしが食わず嫌いで通しているマーメイドと同じで  
すよ。あなたはとても若くて、とても善良だ。

ニーナ あなたの生活は、すてきな生活ですわ！

トリゴリーン ベつにいいところありませんねえ。（時計を出して見る）わたしは、これ  
から行って書かなければならん。まゆる赦してください、暇がないんです。……（笑う）あ  
なたはね、世間で言う「人の痛い肉刺まめ」を、ぐいと踏んづけなすつた。そこでわたしは、  
このとおり興奮して、いささか向つ腹を立てているんです。だがまあ、しばらくお話し  
しましょうか。そのわたしの、すばらしい、明るい生活のことをね。……さてと、何から  
始めたものか？（やや考えて）強迫観念というものがありませんね。人がたとえば月な  
ら月のことを、夜も昼ものべつ考えていると、それになるのだが、わたしにもそんな月  
があるんです。夜も昼も、一つの考えが、しつこく私にとっついて離れない。それは、  
書かなくちやならん、書かなくちや……というやつです。やつと小説を  
一つ書きあげたかと思うと、なぜか知らんがすぐもう次のに掛からなければならん、そ  
れから三つ目、三つ目のお次は四つ目……といった具合。まるでえきてい駅えきてい馬車みたいに、

のべつ書きどおしで、ほかに打つ手が無い。そのどこがすばらしいか、明るいか、ひとつ伺いたいものだ。いやはや、野蠻きわまる生活ですよ！ 今こうしてあなたとお喋りしゃべをして、興奮している。ところがその一方、書きかけの小説が向うで待っていることを、一瞬たりとも忘れずにいるんです。ほらあすこに、グランド・ピアノみたいな恰好かつこうの雲が見える。すると、こいつは一つ小説のどこかで使つてやらなくちゃ、と考える。グランド・ピアノのような雲がうかんでいた、とね。ヘリオトロープの匂においがする。また大急ぎで頭ここへ書きこむ。甘つたるい匂におい、後家さんの色、こいつは夏の夕方の描写に使おう、とね。こうして話をしていても、自分やあなたの一言一句を片っぱしから捕つかまえて、いそいで自分の手文庫のなかへほうりこむ。こりや使えるかも知れんぞ！ というわけ。一仕事すますと、芝居なり釣りなりに逃げだす。そこでほっと一息ついて、忘我の境にひたれるかと思うと、どっこい、そうは行かない。頭のなかには、すでに新しい題材という重たい鉄のタマがころげ回つて、早く机へもどれと呼んでいる。そこでまたぞろ、大急ぎで書きまくることになる。いつも、しよつちゆうこんなふうで、われとわが身に責め立てられて、心のやすまるひまもない。自分の命を、ぼりぼり食っているよな気持です。何者か漠然ぼくぜんとした相手に蜜みつを与えようとして、僕は自分の選えり抜きの

花から花粉をかき集めたり、かんじんの花を引きむしったり、その根を踏み荒したりしているみたいなものです。それで正気と言えるだろうか？ 身近な連中や知り合いが、果してわたしをまともにも扱ってくれてるだろうか？ 「いま何を書いておいでです？

こんどはどんなものですか？」聞くことと言ったら同じことばかり。それでわたしは、知り合いのそんな注目や、讚辞さんじや、随喜の涙が、みんな嘘っぱちで、寄ってたかってわたしを病人あつかいにして、いい加減な気休めを言っているみたいなのがする。うかうかしてると、誰かうしろから忍び寄って来て、わたしをとっつかまえ、あのポプリーシチン（訳注 ゴーゴリの『狂人日記』の主人公）みたいに、気違い病院へぶちこむんじゃないかと、こわくなることもある。それじゃ、わたしがやつと物を書きだしたころ、まだ若くて、生気にあふれていた時代はどうかというところ、これまたわたしの文筆生活は、ただもう苦しみの連続でしたよ。駆けだしの文士というものは、殊ことに不遇な時代がそうですが、われながら間の抜けた、不細工な余計者みたいな気のするものにしてね、神経ばかりやたらに尖とがらせて、ただもう文学や美術にたずさわっている人たちのまわりを、ふらふらうろつき回らずにはいられない。認めてももらえず、誰の目にもはいらず、しかもこつちから相手の眼を、まともにくいと見る勇氣もなく——まあ言ってみれば、一

文なしのバクチきちがいといったぎまです。わたしは自分の読者に会ったことはなかったけれど、なぜかわたしの想像では、不愛想な疑ぐりぶかい人種のように思えましたね。わたしは世間というものが恐<sup>こわ</sup>かった。ものすごい怪物のような気がした。自分の新作物が上演されるようなことになる、いつもきまって、黒い髪の毛の人は敵意<sup>いだ</sup>を抱<sup>いだ</sup>いている、明るい髪の毛の人は冷淡な無関心派だと、そんな気がしたものです。思いだしてもぞつとする！　じつになんとも言えない苦しみでした！

ニーナ　ちよつとお待ちになつて。でも、感興<sup>わ</sup>が湧<sup>わ</sup>いてきた時や、創作の筆がすすんでい  
る時は、崇高な幸福の瞬間をお味わいになりませんか？

トリゴーリン　それはそうです。書いているうちは愉快です。校正をするのも愉快だな。

だが……いざ刷りあがつてしまうと、もう我慢<sup>わ</sup>がならない。こいつは見当<sup>あ</sup>が狂<sup>あ</sup>つた、しくじつた、いつそ書かないほうがよかつたのだと、むしゃくしゃして、気が滅<sup>め</sup>入<sup>い</sup>るんですよ。……（笑う）ところが、世間は読んでくれて、「なるほど、うまい、才筆だな」

とか、「うまいが、トルストイには及びもつかんね」とか、「よく書ける、しかしツルゲーネフの『父と子』のほうが上だよ」とか、仰<sup>おほ</sup>せになる。といったわけで、結局、墓にはいるまでは、明けても暮れても「うまい、才筆だ」「うまい、才筆だ」の一点ば

りで、ほかに何にもありやしない。さて死んでしまうと、知り合いの連中が墓のそばを通りかかって、こう言うでしょうよ。「ここにトリゴリンが眠っている。いい作家だったが、ツルゲーネフには敵<sup>かな</sup>わなかったね」

ニーナ でもちよつと。わたし、そんなお話は頂きかねますわ。あなたは、成功に甘えてらっしやるんだわ。

トリゴリン どんな成功にね？ わたしはついぞ、自分でいいと思ったことはありませんよ。わたしは作家としての自分が好きじゃない。何よりも悪いことに、わたしは頭がもやもやしていて、自分で何を書いているのかわからないんです。……わたしはほら、この水が好きだ。木立や空が好きだ。わたしは自然をしみじみ感じる。それはわたしの情熱を、書かずにいられない欲望をよび起す。ところがわたしは、単なる風景画家だけじゃなくて、その上に社会人でもあるわけだ。わたしは祖国を、民衆を愛する。わたしは、もし自分が作家であるならば、民衆や、その苦悩や、その将来について語り、科学や、人間の権利や、その他いろんなことについても語る義務がある、と感じるわけです。そこでわたしは、何もかも喋<sup>しゃべ</sup>ろうとさせる。わたしは四方八方から駆り立てられ、叱<sup>しか</sup>りどばされ、まるで獵犬に追いつめられた狐<sup>きつね</sup>さながら、あっちへすつ飛び、こっちへすつ



飛びしているうちに、みるみる人生や科学は前へ前へと進んで行ってしまい、わたしは汽車に乗りおくれた百姓みたいに、ずんずんあとにとり残される。で、とどのつまりは、自分でできるのは、自然描写だけだ、ほかのことにかけては一切じぶんはニセ物だ、骨の髄までニセ物だ、と思っちゃうんですよ。

ニーナ あなたは過労のおかげで、自分の値打ちを意識するひまも気持も、ないんですわ。たとえばご自分に不満だろうとなんだだろうと、ほかの人にとってはあなたは偉大でりっぱな方なのよ！ もしわたしが、あなたみたいな作家だったら、自分の全生命を民衆に捧<sup>ささ</sup>げてしまうわ。でも心のなかでは、民衆の幸福はただ、わたしの所まで向上してくるのとだと、はつきり自覚しますわ。すると民衆は、わたしを祭礼の馬車に乗せて引きまわしてくれるわ。

トリゴーリン ほう、祭礼の馬車か。……アガメンノンですかね、このわたしが！（ふたり微笑する）

ニーナ 女流作家とか女優とか、そんな幸福な身分になれるものなら、わたしは周囲の者に憎まれても、貧乏しても、幻滅しても、りっぱに堪えてみせますわ。屋根うら住まいをして、黒パンばかりかじって、自分への不満だの、未熟さの意識だのに悩んだってか

まわらない。その代り、わたしは要求するのよ、名声を……ほんとうの、割れ返るような名声を。……（両手で顔をおおう）頭がくらくらする……ああ！

アルカージナの声（家の中から）トリゴーリンさん！

トリゴーリン わたしを呼んでいる。きつと荷づくりでしょう。だが、発ちたくないなあ。

（湖の方を振返つて）なんと自然の恩恵だ！……すばらしい！

ニーナ 向う岸に、家と庭が見えるでしょう？

トリゴーリン ええ。

ニーナ あれが、亡なくなつた母の屋敷です。わたし、あすこで生れたの。それからずっと、

この湖のそばで暮しているものだから、どんな小さな島でもみんな知っていますわ。

トリゴーリン ここはまったくすばらしい！（鷗かもめを見とめて）なんです、これは？

ニーナ かもめよ。トレープレフさんが射うつたの。

トリゴーリン きれいな鳥だ。いや、どうも発ちたくないなあ。ひとつアルカージナさん

を説きつけて、もつといるようにしてください。（手帳に書きこむ）

ニーナ なに書いてらっしゃるの？

トリゴーリン ちよつと書きとめとくんです。……題材が浮んだものでね。……（手帳を

しまいながら）ほんの短編ですがね、湖のほとりに、ちやうどあなたみたいなきい娘が、子供の時から住んでいる。鴟のように湖が好きで、鴟のように幸福で自由だ。ところが、ふとやって来た男が、その娘を見て、退屈まぎれに、娘を破滅させてしまう——ほら、この鴟のようにね。

間。——やがて窓にアルカージナが現われる。

アルカージナ トリゴーリンさん、どこにいらつしやるの？

トリゴーリン 今すぐ！（行きかけて、ニーナを振返る。窓のそばでアルカージナに）  
なんです？

アルカージナ わたしたち、このままいることにしますわ。

トリゴーリン、家へはいる。

ニーナ （脚光ちかく歩みよる。やや沈思ののちに）夢だわ！



## 第三幕

ソーリン家の食堂。左右にドア。食器棚<sup>だな</sup>。薬品の戸棚。部屋の中央にテーブル。旅行カバンが一つ、帽子のボール箱が幾つか。出<sup>しゅったつ</sup>立<sup>たつ</sup>の用意が見てとられる。トリ  
 ゴーリンが朝食（訳注 だいたい早おひるの時刻）をしたため、マーシヤはテーブルのそばに立っている。

マーシヤ　これはみんな、作家としてのあなたにお話しするんです。お使いになってもか  
 まいませぬ。良心にかけて言いますけれど、あの人の傷が重傷だったら、わたし一分間  
 たりと生きてはいなかったでしょう。でも、わたしはこれで勇気があります。だから、  
 きつぱり決心しました。この恋を胸<sup>こし</sup>から引っこ抜いてしまおうと。根ごと一思いにね。  
 トリゴーリン　どんな具合にね？

マーシヤ　嫁に行くんです。メドヴェージエンコのところへ。

トリゴーリン　あの教師<sup>せんせい</sup>のところへね？

マーシヤ ええ。

トリゴーリン わからんな。なんの必要があつて。

マーシヤ 望みもないのに恋をして、何年も何年も何か待っているなんて……。いったん嫁に行つてしまえば、もう恋どころじゃなくなつて、新しい苦勞で古いことはみんな消されてしまう。それだけでも、ね、変化じゃありませんか。いかが、もう一つ？

トリゴーリン 過ぎやしないかな？

マーシヤ なあに、平氣！（一杯ずつつぐ）そんなに人の顔を見ないでください。女と  
いうものは、あなたの考えてらつしやるより、よく飲みますわよ。わたしみたいに大つ  
びらにやるのは少ないけれど、こつそり飲むのは大勢いますわ。そうよ。しかもきまつ  
て、ウオトカかコニヤツクですわ。（杯を当てて）プロジツト！ あなたは、さつぱり  
した方ね。お別れするの残念ですわ。（ふたり飲みほす）

トリゴーリン わたしだつて、発ちたくはないんだが。

マーシヤ だからあの人に、もつといるようにお頼みになつたら。

トリゴーリン いや、もういるつもりはないでしょう。なにしろあの息子むすこが、でたらめばかり  
やらかすんでね。ピストル自殺をやりかけたと思えば、今度はこのわたしに、決闘

を申しこむとかなんとかいう話だ。一体なんのためかな？ ふくれたり、鼻を鳴らしたり、新形式論をまくし立てたり……。いや、座席はまだたつぷりあいている。新しいものにも古いものにもね、——何も押し合うことはない。

マーシヤ それに嫉妬しつとも手伝ってね。でも、わたしの知った事じゃないわ。

間。ヤークフが左手から右手へ、トランクをさげて通る。ニーナが登場して、窓ぎわに立ちどまる。

マーシヤ わたしのあの教師せんせいは、大してお利口さんじゃないけれど、なかなかいい人だし、貧乏だし、それにとてもわたしを愛してくれるの。いじらしくなりますわ。年とつたお母さんも、可哀かわいそうだし、では、ご機嫌よろしゅう。わるくお思いにならないでね。（かたく握手する）ご親切にいろいろありがとうございました。ご本が出たらお送りくださいね、きつと署名なすつてね。ただ、「わが敬愛する」なんてしないで、ただあつさり、「身もとも不明、なんのためこの世に生きるかも知らぬマリヤへ」としてね。さようなら！（退場）

ニーナ（握り拳こぶしにした片手を、トリゴーリンのほうへさしのべながら）偶数？ 奇数？  
トリゴーリン 偶数。

ニーナ（ため息をついて）いいえ。手の中には、豆が一つしかないの。わたし占ってみたのよ、女優になろうか、なるまいかって。誰か、こうしたらと言ってくれるといいんだけれど。

トリゴーリン そんなこと、言える人があるものですか。（間）

ニーナ お別れですわね……多分もう二度とお目にかかる時はないでしょう。どうぞ記念に、この小さなロケットをお受けになって。あなたの頭文字かしらもじを彫うせましたの……こちら側には『昼と夜』と、あなたのご本の題をね。

トリゴーリン じつに優美だ！（ロケットに接吻せつぶんする）何よりの贈物です！

ニーナ 時にはわたしのことも思い出してね。

トリゴーリン 思い出しますとも。その思い出すのは、あの晴れた日のあなたの姿でしょうよ——覚えてますか？——一週間まえ、あなたが薄色の服を着てらした時のことを……いろいろな話をしましたっけね……それにあの時、ベンチに白い鷗かもめがのせてあった。

ニーナ（物思わしげに）ええ、かもめが……（間）もうお話してはいられません、人が



来ます。……お発ちになる前、二分だけわたしにくださいまし、お願い。……（左手へ退場。同時に右手から、アルカージナ、燕尾服えんびふくに星章をつけたソーリン、それから荷作りに大童おおわらわのヤーコフが登場）

アルカージナ お年寄りは、ここにじっとしてらっしゃいよ。そんなリョーマチのくせに、お客に出あるく法があるものですか？（トリゴーリンに）いま出て行ったのは誰？

ニーナですの？

トリゴーリン ええ。

アルカージナ 失礼パルドン、お邪魔しましたわね……（腰をおろす）さあ、どうにかすつかり

片づいた。へとへとよ。

トリゴーリン（ロケットの字を読む）『昼と夜』、百二十一ページ、十一と二行。

ヤーコフ（テーブルの上を片づけながら）釣竿つりざおもやはり入れますんで？

トリゴーリン そう、あれはまだ要いるからね。本はみな誰かにやってくれ。

ヤーコフ かしこまりました。

トリゴーリン（ひとりごと）百二十一ページ、十一と二行。はて、あすこには何が書いてあったつけ？（アルカージナに）この家に、わたしの本があったかしら？

アルカージナ 兄の書齋の、隅すみつこの棚にありますよ。

トリゴーリン 百二十一ページと……（退場）

アルカージナ ね、ほんとにペトルーシヤ、ここにじっとしていらつしやいよ……

ソーリン お前たちが発たつて行くと、あとにぽつねんとしてるのは幸つらくてな。

アルカージナ じゃ、町へ行けばどうなの？

ソーリン 格別どうということもないが、だがやつぱりな……（笑う）県会の建物の建て

前もあるし、とまあいった次第でな。……せめて一時間でも二時間でも、この穴ごもり

のカマス（訳注 シチエドリーンの童話『かしいカマス』より）みたいな生活から飛

び出したいんだよ。そうでもしないと、わたしは古パイプみたいに、棚のすみですつ

り埃ほこりまみれだからな。一時に馬車を回すように言いつけたから、いつしよに出かけよう。

アルカージナ （間を置いて）じゃ、ここでお暮しなさいね、退屈かぜがらずに、お風邪を召

さずにね。あの子の監督をおねがいますよ。よく気をつけてやってね。導いてやって

ね。（間）こうしてわたしが発たつてゆけば、なぜコンスタンチンがピストル自殺をしよ

うとしたのか、それも知らずじまいになるのね。どうやらわたしには、おもな原因は嫉し

妬つとだったような気がする。だから一刻も早くトリゴーリンを、ここから連れ出したほう

が いい の よ。

ソーリン さあ、なんと 言った も の かな？ ほかに も 原因 は あつた ろう さ。論より 証拠――

――若 盛 り の 頭 の ある 男 が、草 ぶ か い 田 舎 ぐ ら し を し て い て、金 も な け れ ば 地 位 も な く、未 来 の 望 み も な い と き て る ん だ か ら な。なんに も す る こ と が な い。その ぶ ら ぶ ら 暮 し が、恥 ず か し く も あ り 空 怖 ろ し く も あ る ん だ な。わ た し は あ の 子 が 可 愛 くて な ら ん し、あれ の ほ う で も わ た し に 懐 い て く れ る が、だ が や つ ぱ り 早 い 話 が、あ れ は 自 分 が こ の 家 の 余 計 も ん だ、居 候 だ、食 客 だ と い う 気 が す る ん だ。論より 証拠、だ い い ち 自 尊 心 が な

……

アルカージナ あ の 子 に は、ほ ん と に 泣 か さ れ る わ！ (考 え こ ん で) 勤 め に 出 て み た ら

ど う か し ら ……

ソーリン (口 笛 を 鳴 ら し、や が て た め ら い が ち に) わ た し は ね、い ち ぼ ん の 上 策 は、も し も お 前 が …… あ の 子 に 少 し ば か り 金 を 持 た し て や つ た ら ど う か と 思 う よ。何 は さ て お き、あ の 子 も 人 並 の 身 な り は せ に や な ら ん し、と ま あ い つ た 次 第 で な。見 て ご ら ん、着 た き り 雀 の ぼ ろ フ ロ ッ ク を、こ れ で も う 三 年 ご し 引 き ず つ て、外 套 も 着 て な い 始 末 じ や な い か。 …… (笑 う) そ れ に 若 い 者 に や、少 し 気 晴 ら し を さ せ る も よ か ろ う て。 ……

ひとつ外国へでも出してみるかな。……なあに、大して金もかかるまい。

アルカージナ　でもねえ。……まあ、服ぐらいは作ってやれるでしょうけど、外国まではねえ。……いいえ、今のところは、服だつて駄目だわ。（きつぱりと）わたし、お金がありません！

ソーリン　笑う。

アルカージナ　ないのよ！

ソーリン　（口笛を鳴らす）なるほどな。いやご免ご免、堪忍かにしておくれ。お前の言うとおりだろうとも。……お前は気前のいい、鷹揚おうような女だからな。

アルカージナ　（涙ぐんで）わたし、お金がありません！

ソーリン　わたしに金さえありや、論より証拠、ほんどあれに出してやるがな、あいにくとすつてけてん、五錢玉一つない。（笑う）わたしの恩給は、のこらず支配人が取りあげおつて、農作だ牧畜だ蜜蜂みつばちだと使いまわす。そこでわたしの金は、元も子もなくなつちまう。蜂は死ぬ、牛もくたばる。馬だつて、ついぞわたしに出してくれたためしが

ない。……

アルカージナ それはわたしだつて、お金のないことはないけれど、なにせ女優ですものね。衣裳いしやう代だけでも身代かぎりしちまうわ。

ソーリン お前はいい子だ、可愛い女だ。……わたしは尊敬しているよ。……そうとも。

……だが、わたしはまた、どうもなんだか……（よろめく）目まいがする。（テーブルにつかまる）気持が悪い、とまあいった次第でな。

アルカージナ （仰天して）ペトルーシャ！（懸命に彼をささえながら）ペトルーシャ、しつかりして……（叫ぶ）誰か来て。誰か早く！……

頭に包帯したトレープレフと、メドヴェージェエンコ登場。

アルカージナ 気持が悪くなったのよ！

ソーリン いやなに、なんでもない……（ほほえんで、水を飲む）もう直った……とまあいった次第でな。……

トレープレフ （母親に）びつくりしないで、ママ、べつに危険はないから。伯父さんは

近ごろちよいちよい、これが起るんです。（伯父に）伯父さん、少し横になるんですね。

ソーリン うん、ちよつぴりな。……だが、とにかく町へは行くよ。……ひと休みして出

かける……論より証拠だ……（杖つえにすがりながら歩く）

メドヴェージェンコ （腕を支えてやりながら）こんな謎なぞ々がありますよ。朝は四つ足、

昼は二本足、夕方は三本足……

ソーリン （笑う）そのとおり。そして、夜にや仰向けか。いやありがとう、もう一人で

行きますよ……

メドヴェージェンコ ほらまた、そんな遠慮を！……（彼とソーリン退場）

アルカージナ ああ、びつくりした！

トレープレフ 伯父さんには、田舎ぐらしが毒なんだ。くさくさするんですよ。もしママ

が、気前よくポンと千五百か二千貸してあげたら、あの人まる一年は町で暮せるのにな

あ。

アルカージナ わたしにお金があるもんですか。わたしは女優で、銀行家じゃないもの。

間。

トレープレフ ママ、包帯を換えてくれませんか。あなたは上手じょうずだから。

アルカージナ (薬品戸棚からヨードホルムと包帯箱を取り出す) ドクトルは遅いこと。

トレープレフ 十時ごろって言ってたのに、もうお午ひるだ。

アルカージナ お坐すわり。(彼の頭から包帯をとる) まるでターバンをしてるみたいだねえ。

きのう、よそ者が台所へ来て、お前のことをなに人じんかと聞いていたつけ。でも、ほんどもう癒なほったようだね。あとはほんのちよっぴりだ。(彼の頭に接吻せつぶんする) わたしがいなくなつてから、またパチンとやりはしないだろうね？

トレープレフ やりやしませんよ、ママ。あのと僕、とてつもなく絶望しちまつて、つい自制できなかつたんです。もう二度とやりはしません。(母の手に接吻する) ああ、

この手——お母さんは、じつにまめな人ですね。おぼえてますよ、ずっと昔のこと、あなたがまだ国立の劇場に出でいたころ、——僕はほんの子供たなこだったけれど、——アパートの中庭でけんかがあつて、店子の洗濯女がひどくなられたことがあつたつけ。ね、おぼえてますか？ 氣絶したその女を、みんなで抱きあげて……それからお母さんは、しじゅうその女を見舞いに行つて、薬を持つてつてやつたり、子供たちに桶おけで行水を使

わしたりしましたね。あれ、おぼえてないかしら？

アルカージナ 忘れたわ。(新しい包帯を巻いてやる)

トレープレフ うちと同じアパートに、あのころバレリーナが二人住んでいて……よくお母さんのところへ、コーヒーを飲みに来たっけ……

アルカージナ それは、おぼえていますよ。

トレープレフ ふたりとも、じつに信心ぶかい人でしたね。(間) このごろ、あれ以来の幾日かというもの、僕はまるで子供のころに返ったみたい、甘えたいような気持で、ただもう一すじに、お母さんを愛しています。あなたのほかに、今じゃ僕には誰ひとりいないんです。ただね、なんだってお母さんは、あんな男に引きずり回されるんです、なぜです？

アルカージナ お前は、あの人がわからないんだよ。えコンスタンチン。あの人は、人格の高いりっぱな人ですよ……

トレープレフ ところが、僕が決闘を申しこもうとしていると人から聞くと、人格者たちまち変じて卑怯者ひきょうものになっちまったってね。いよいよ発たつんでしよう。見ぐるしい脱走だ！



アルカージナ　ばかをお言い！　ここを発つように頼んだのは、このわたしですよ。

トレープレフ　人格の高いりっぱな人か！　やつこさんのおかげで、このとおり母子げんかになりかけてるといふのに、今ごろご本人は客間か庭のどこかで、われわれをせせら笑っていることでしょうか……ニーナを大いに啓発して、彼こそ天才だということを、徹底的にあの子の胸に叩きこもうと、大童の最中でしようよ。

アルカージナ　お前は、わたしに厭がらせを言うのが楽しみなんだね。わたしはあの人を尊敬しているのだから、わたしの前じやあの人のことを悪く言わないでもらいたいね。

トレープレフ　ところが僕は尊敬していない。お母さんは、僕にまであの男を天才だと思わせたんでしょうが、僕は嘘がつけないもんで失礼——あいつの作品にや虫酸が走りますよ。

アルカージナ　それが妬みというものよ。才能のないくせに野心ばかりある人にや、ほんものの天才をこきおろすほかに道はないからね。結構なお慰みですよ！

トレープレフ　（皮肉に）ほんものの天才か！　（憤然として）こうなったらもう言っちゃうが、僕の才能は、あんたがたの誰よりも上なんだ！　（頭の包帯をむしりとる）あんたがた古い殻をかぶった連中が、芸術の王座にのしあがって、自分たちのすることだ

けが正しい、本物だと極めこんで、あとのものを迫害し窒息させるんだ！ そんなもの、誰が認めてやるもんか！ 断じて認めないぞ、あんたも、あいつも！

アルカージナ デカダン……！

トレープレフ さつさと古巢の劇場へ行つて、気の抜けたやくぎ芝居にでも出るがいいや

！

アルカージナ 憚りながら、そんな芝居に出たことはありませんよ。わたしにはかまわな

いどくれ！ お前こそ、やくぎな茶番ひとつ書けなくせに。キーエフの町人！

居候！

トレープレフ けちんぼ！

アルカージナ 宿なし！

トレープレフ腰をおろして、静かに泣く。

アルカージナ いくじなし！ (興奮してふらふら歩きながら) 泣くんじやない。泣かな

いでもいいの。…… (泣く) いいんだよ。…… (息子の額や頬や頭にキスする) 可愛い

わたしの子、堪忍かにしておくれ。……罪ぶかいお母さんを赦ゆるしておくれ。不仕合せなわたしを赦しておくれ。

トレープレフ（母親を抱いて）僕の気持がお母さんにわかつたらなあ！僕は何もかも、すっかり失なくしてしまった。あの人は僕を愛していない、僕はもう書く気がしない……希望がみんな消えちまったんだ……

アルカージナ　そう気を落すんじゃない。……みんなうまく行きますよ。あの人は今すぐ発つていくし、あの子もまたお前が好きになるよ。（息子の涙を拭ふいてやる）さ、もういい。これで仲直りよ。

トレープレフ（母親の手にキスして）ええ、ママ。

アルカージナ（やさしく）あの人とも仲直りしてね。決闘なんぞいるものかね。……ね、そうだね。

トレープレフ　え、いいです。……ただね、ママ、あの男と顔を合せないで済むようにしてください。思っただけでも辛いんです……とても駄目なんです……（トリグリーン登場）ほら来た。僕出ていきます。……（手早く薬品を戸棚にしまう）包帯はいずれ、ドクトルにしてもらいます……

トリゴージン（本のページをさがしながら）百二十一ページ……十一と二行。……これだ。……（読む）「もしいつか、わたしの命がお入り用になったら、いらして、お取りになってね」

トレープレフ、床の包帯をひろって退場。

アルカージナ（時計をちらと見て）そろそろ馬車が来ますよ。

トリゴージン（ひとりごと）もしいつか、わたしの命がお入り用になったら、いらして、お取りになってね。

アルカージナ あなたの荷づくりは、もうできたでしょうね？

トリゴージン（もどかしげに）ええ、ええ……（考えこんで）この清らかな心の呼びかけのなかに、なぜおれには悲哀の声が聞えるんだろう。なぜおれの胸は、切ないほどにし緊めつけられるんだろう？……もしいつか、わたしの命がお入り用になったら、いらして、お取りになってね。（アルカージナに）もう一日、いようじゃないか！

アルカージナ、かぶりを振る。

トリゴーリン　ね、いようじやないか！

アルカージナ　あなた、何に後ろ髪を引かれてらっしやるか、わたしちゃんと知っていますよ。でも、自制力がなくちゃ駄目。ちよつぱり酔ってらっしやる、正気におなりなさい。

トリゴーリン　君もひとつ正気になつてもらいたいな。聡明そうめいな、分別のある人間になつて、お願いだから、この問題をじっくり見ておくれ、眞実の友としてね。……（女の手を握つて）君は犠牲になれる人だ。……僕の親友になつてくれ、僕を行かせておくれ……

：

アルカージナ　（すつかり興奮して）そんなに夢中なの？

トリゴーリン　どうしても惹ひきつけられるんだ！　ひよつとすると、これこそ僕の求めていたものかも知れない。

アルカージナ　たかが田舎娘の愛がね？　あなたはなんて自分を知らないんでしょうね！  
トリゴーリン　時どき人間は、歩きながら眠ることがある。まさにそのとおりこの僕も、

こうして君と話をしていながら、じつはうとうとして、あの子の夢を見ているようなものだ。……なんともいえない甘い夢想の、とりこになってしまったんだ。……行かせておくれ。

アルカージナ (ふるえながら) 厭、厭。……わたしは平凡な女だから、そんな話は、お門<sup>かど</sup>ちがいよ。……いじめないで、わたしを、ボリース。……わたし、こわい……

トリゴーリン その気になりさえすりや、非凡な女になれるんだ。幻の世界へ連れていてくれるような、若々しい、うつとりさせる、詩的な愛——この世でただそれだけが、幸福を与えてくれるのだ！ そんな愛を、僕はまだ味わったことがない。……若いころは、雑誌社へお百度をふんだり、貧乏と闘ったりで、そんなひまがなかった。今やつとそれが、その愛が、ついにやってきて、手招きしているんだ。……それを避けなければならん理由が、どこにある？

アルカージナ (憤然と) 気がちがったのね！

トリゴーリン それでもかまわん。

アルカージナ あんたがたは今日、言い合せたように、寄ってたかってわたしをいじめるのね！ (泣く)

トリゴリーン （自分の頭をかかえて）わかつてくれない！ てんでわかろうとしないんだ！

アルカージナ ほんとにわたし、そんなに老<sup>ふ</sup>けて、みつともなくなってしまったの？ わたしの前で、ほかの女の子の話を大っぴらにやれるなんて！（男を抱いてキスする）ああ、あなたは正気じゃないのよ！ わたしの大事な、いとしいひと……。あなたこそ——わたしの一生の最後のページよ！（ひざまずく）わたしの悦<sup>よろこ</sup>び、わたしの誇り、わたしの無量の幸福……。彼の膝<sup>ひざ</sup>を抱く）たとえ一時間でもあなたに棄<sup>す</sup>てられたら、わたしは生きちゃいけない、気がちがってしまう。わたしのすばらしい、輝かしい人、わたしの王さま……

トリゴリーン 人が来ますよ。（女をたすけ起す）

アルカージナ いいじゃないの。あなたを愛しているこの気持が、誰に恥<sup>は</sup>ずかしいものですか。（男の両手にキスする）わたしの大事な宝もの、向う見<sup>ま</sup>いずな悪いひと、あなたはばかなまねがしたいんでしようけれど、わたしは厭<sup>いや</sup>です、放<sup>はな</sup>しません。……（笑う）あなたは、わたしのものなの、わたしのものよ。この額<sup>ひたい</sup>もわたしのもの。この眼もわたしのもの。このきれいな、絹のような髪の毛も、やっぱりわたしのもの。……あなたはす

つまり、わたしのもの。あなたは本当に天才で、聡明で、今のどの作家よりもりっぱで、ロシアのただ一つの希望なのよ。……あなたの筆には、まごころがこもって、じつにすつきりして、新鮮で、おまけに健康なユーモアがあるわ。……あなたはほんの一刷毛<sup>はけ</sup>で、人物や風景のカン所が出せるのね。あなたの人物は生きているわ。あなたのものを読んで、夢中になれずにいられるものですか！ これがお世辞だと思いの？ わたしのおべつかなの？ さ、わたしの眼を見てちょうだい……よく見て……。わたしが嘘つきに見える？ そらごらんささい、あなたの偉さのわかるのは、わたしだけよ。本当のことをあなたに言うのも、わたしだけよ、ね、大事な、可愛いひと。……発つ<sup>た</sup>でしようね？  
そうでしょ？ わたしを棄てはしないことね？

トリゴリン おれには自分の意志というものがない。……おれはついぞ、自分の意志をもった例<sup>ため</sup>しがないのだ。……気の抜けた、しんのない、いつも従順な男——一体これで女にもてるものだろうか？ さ、つかまえて、どこへなり連れて行ってくれ。ただね、一足もそばから放すんじゃないぞ……

アルカージナ (ひとりごと) これで、わたしのものだ。(けろりと、どこを風が吹くといった調子で) でもね、もしお望みなら、お残りになってもいいことよ。わたしは一人



で発つから、あなたはあとで、一週間もしたら帰ってらっしゃい。あなたはべつに、急ぐ用もないんですものね。

トリゴージン いや、こうなつたらいつしよに発とう。

アルカージナ お好きなように。いつしよならいつしよでいいわ。……（間）

トリゴージン、手帳に書きこむ。

アルカージナ なんですの、それ？

トリゴージン けさ、うまい言い方を聞いたもんでね。「処女の林……」だとき。これは使える。（伸びをする）じゃ、出かけるんだね？ また汽車か、停車場、食堂、カツレ

ツ、おしゃべり……

シャムラーエフ（登場）まことに残念ながら、申しあげます、馬車をお回ししました。

どうぞ奥さま、停車場へお出かけの時刻です。汽車は二時五分に着きます。それではアルカージナさま、おそれいりますが、役者のスズダーリツエフが今どこにいますか、お忘れなくお調べねがいますよ。生きているかな？ 達者ですか？ むかしはいつしよ

に飲んだものでしたっけ。あの『郵便強盗』（訳注 十九世紀末のメロドラマの題）なんかやらせると、天下一品でしたな。……あれといっしよに、さよう、エリサヴェトグロードで悲劇役者のイズマイロフが出ておりましたが、これまたなかなかの傑物えらぶつでしてな。……いや奥さま、そうお急ぎになることはありません、まだ五分は大丈夫です。あるメロドラマでね、連中が謀叛人むほんにんをやった時でしたが、不意に捕り手とが踏みこむところで「残念、ワナにかかったか」と言うべきところを、イズマイロフは——「残念、ナワにかかったか」とやってね……（哄笑こうしょうする）ナワにかかったか！

彼がしゃべっている間に、ヤーコフは旅行カバンの世話をやき、小間使は帽子やマントやコウモリや手袋を、アルカージナに持ってくる。皆々アルカージナの身支度を手伝う。左手のドアから料理人がのぞきこみ、しばらくためらった後、おずおずとはいつてくる。ポリーナ、やがてソーリン、メドヴェージェエンコ登場。

ポリーナ（手かごを持って）このスモモを、どうぞ道中めしあがって……。大そう甘うごございますよ。何か変ったものも、欲しくおなりかも知れませんか……

アルカージナ まあ御親切にね。ポリーナさん。

ポリーナ ご機嫌よろしゅう、奥さま！ 不行届きのことがありましたら、お赦しくださいませ。 (泣く)

アルカージナ (彼女を抱いて) みんな結構でしたよ、結構でしたよ。ただその、泣くのがいけないわ。

ポリーナ わたくしたちの時は過ぎて行きますもの！

アルカージナ 仕方のないことよ！

ソーリン (トンビに中折れ帽をかぶり、ステッキを持って左手のドアから登場。部屋を横ぎりながら) お前、もう時間だよ。おくれたら事だからな、早い話が。わたしは行って乗りこんでるよ。 (退場)

メドヴェージェンコ 僕は停車場まで歩いて行きます……お見送りにね。ひとつ急いで…… (退場)

アルカージナ さようなら、皆さん。……おたがい無事で達者だったら、また夏お目にかかりましょうね。…… (小間使、ヤーコフ、料理人、それぞれ彼女の手にキスする) わたしを忘れないでね。 (料理人に一ルーブリやって) この一ルーブリ、三人でお分け。

料理人 どうもありがとうございます、奥さま。道中ごぶじで！何かとよくして頂きまして！

ヤーコフ どうぞ、ご息災で！

シャムラーエフ ちよいと一筆お手紙を頂きたいもので！ご機嫌よう、トリゴーリンさん！

アルカージナ どこだろう、コンスタンチンは？わたしは発ちますって、あの子に言うておくれ。お別れをしなくては。じゃ皆さん、悪く思わないでね。（ヤーコフに）コックさん一ルーブリ渡しましたよ。あれは三人分だからね。

一同右手へ退場。舞台空虚。舞台うらで、見送りによくあるざわめき。小間使がもどってきて、テーブルからスモモの籠かごをとり、ふたたび退場。

トリゴーリン（もどってくる）ステッキを忘れたぞ。たしかテラスにあるはずだが。

（行きかけて、左手のドアのところで、はいつてくるニーナに出あう）ああ、あなたか？ われわれはもう発ちます。

ニーナ まだお目にかかれるような気が、していましたわ。（興奮して）トリゴリーンさん、わたしきつぱり決心しました。賽さいは投げられたんです、わたし舞台に立ちます。あしたはもう、ここにはいません。父のところを出て、一切をすてて、新しい生活を始めます。……わたしも、あなたと同じに……モスクワへ発ちます。あちらでお目にかかりましょう。

トリゴリーン （ちらと後ろを振り返って）宿は、「スラヴァンスキイ・バザール」（訳注）モスクワの有名なホテル）になさい。……そしてすぐ僕に知らせて……モルチャーノフカ、グロホーリスキイ館。……いまは急ぐから……（間）

ニーナ もう一分だけ……

トリゴリーン （小声で）あなたは、なんてすばらしい……。ああ、またすぐ会えるかと思うと、じつに幸福だ！（彼女は男の胸にもたれかかる）僕はまた見られるのだ——この魅するような眼を、なんとも言えぬ美しい優しい微笑を……この柔らかな顔だちを、天使のように清らかな表情を。……僕の大事な……（長いキス）

——幕——

○第三幕と第四幕のあいだに二年経過。

## 第四幕

ソーリン家の客間の一つ。今はトレープレフが仕事部屋に使っている。右手と左手にドアがあつて、それぞれ奥の間へ通じる。正面はテラスへ出るガラス戸。ふつうの客間用の調度のほかに、右手の隅すみに書きものデスク、左手ドア寄りにトルコ風の長椅子ながいす、書棚。窓や椅子のここに本。——宵よい。笠かさつきのランプが一つともつてゐる。薄暗い。木立のざわめきや、煙突のなかで風のうなる音がする。夜番の拍ひょう子木しぎの音。メドヴェージエンコとマーシャ登場。

マーシャ（呼ぶ）トレープレフさん！　トレープレフさん！（見まわしながら）だあれもない。爺じいさんたら、のべつ幕なしに聞きどおしなんだもの、コースチャはどこにゐる、コースチャはどこにゐるって。……あの人がないじゃ、生きてられないのね……

メドヴェージエンコ　孤独さびがこわいんだ。（耳をすます）なんて凄すごい天気だ！　これでも

う二昼夜だからな。

マーシヤ (ランプの火を大きくして) 湖には波が立ってるわ。大きな波が。

メドヴェージエンコ 庭はまつ暗だ。ひとつ毀すように言わなけりやいかな、庭のあの小劇場はね。むき出しで、醜く立っているさまは、まるで骸骨だ。幕は風でばたついているし。ゆうべ僕があのでそばを通りかかったら、誰かなかで泣いてるような気がしたよ。

マーシヤ また、あんなことを…… (間)

メドヴェージエンコ うちへ帰ろう、マーシヤ!

マーシヤ (かぶりを振る) わたし、ここに泊るの。

メドヴェージエンコ (哀願するように) マーシヤ、帰ろうよ! 赤んぼがきつと、腹を

すかしてるよ。

マーシヤ 平気よ。マトリョーナが飲ませてくれるわ。 (間)

メドヴェージエンコ 可哀<sup>かわい</sup>そうだ。もうこれで三晩、おつ母<sup>か</sup>さんの顔を見ないんだからな。

マーシヤ あんたも、退屈な人になったものね。以前は、哲学の一つも並べたものだけけれど、今じゃのべつ、赤んぼ、帰ろう、赤んぼ、帰ろう、なんだもの、——ばかの一つ覚



えみたい。

メドヴェージエンコ 帰ろうよ、マーシヤ！

マーシヤ ひとりで帰ったらいわ。

メドヴェージエンコ お前のお父さん、僕にや馬を出してくれないよ。

マーシヤ 出してくれてよ。願いますと言や、出してくれるわ。

メドヴェージエンコ まあ、頼んでみよう。じゃあすは帰るだろうね？

マーシヤ (かぎタバコをかぐ) ええ、あしたはね。うるさいわねえ……

トレープレフとポリーナ登場。トレープレフは枕まくらと毛布もふを、ポリーナはシーツを持ちこみ、トルコ風の長椅子の上に置く。それからトレープレフは自分のデスクに行つて、腰をおろす。

マーシヤ それ、どうするの、ママ？

ポリーナ ソーリンさんが、コースチャの部屋とこに床をとつてくれとおっしゃるんだよ。

マーシヤ わたしがするわ…… (寢床をつくる)

ポリーナ（ため息をついて）年をとると、子供も同じだねえ……（デスクに近寄り、肘ひじをついて原稿をながめる。間）

メドヴェージエンコ　じゃ、僕は行こう。おやすみ、マーシヤ。（妻の手にキスする）おやすみなさい、お母さん。（しゅうとの手にキスしようとする）

ポリーナ（腹だたしげに）いいからさ！ さっさとお帰り。

メドヴェージエンコ　おやすみ、トレープレフさん。

トレープレフ黙って手を出す。メドヴェージエンコ退場。

ポリーナ（原稿をながめながら）ねえ、コースチャ、あなたが本当の文士になるなんて、誰ひとり夢にも思いませんでしたよ。それが今じゃ、ありがたいことに、方々の雑誌からお金がくるようになりましたものね。（彼の髪を撫なでる）それに、男前も一段とあがつて、……ねえ、可愛いかわいコースチャ、いい子だから、うちのマーシヤに、もう少し優しくしてやってくださいね！……

マーシヤ（床をのべながら）そつとしておいたげてよ、ママ。

ポリーナ（トレープレフに）これで、なかなか好い子さんですよ。（間）女というものはね、コースチャ、優しい目で見てもらいさえすりや、ほかになんにも要いらないものよ。わたしも身に覚えがあるけど。

トレープレフ、デスクから立ちあがり、黙って退場。

マーシヤ ほら、怒らしちまった。うるさくするからよ！

ポリーナ わたしはお前が不憫ふびんなんだよ、マーシエンカ。

マーシヤ ありがたい仕合せだわ！

ポリーナ お前のことで、わたしは胸を痛めつづけてきたよ。すっかり見てるんだものね、みんなわかってるんだものね。

マーシヤ みんな、ばかげたことよ。望みなき恋なんて、小説にあるだけだわ。くだらない。ただ、よせばいいのよ——甘ったれた気持ちになって、待てば海路の日和ひよりだかなんだか、ぼかんと何かを待っている、そんな態度をね。……心に恋が芽を出したら、摘んで捨てるまでのことよ。うちの人を、ほかの郡へ転任させてくれるって話になってるの。

そこへ移ってしまったば、——きれいに忘れるわ……胸から根こぎにってしまうわ。

ふた部屋ほど向うで、メランコリックなワルツが聞える。

ポリーナ コースチャが弾いている。気がふさぐんだね。

マーシャ (音を立てずに、二回り三回りワルツを舞う) 肝心なのはね、ママ、目の前に見えないということなのよ。うちのセミヨンが転任になりさえすりや、あっちへ行つて、ひと月で忘れてみせるわ。みんな、くだらないことよ。

左手のドアがあいて、ドールンとメドヴェージェンコが、車椅子のソーリンを押しながら登場。

メドヴェージェンコ 僕のところは、今じゃ六人家族でしてね。ところが粉は一プード  
(訳注 十六キロ余) 七十コペイカもするんで。

ドールン そこでキリキリ舞いになる。

メドヴェージェンコ あなたは笑っていればいいでしょう。お金のうなってる人はね。

ドールン お金が？ 開業して以来三十年、いいかね君、しかも昼も夜も自分が自分のものでない、落ちつかぬ生活をしてきて、蓄めた金がやと二千だぜ。それもこのあいだ、外国旅行で使ってしまった。僕は一文なしさ。

マーシヤ (夫に) まだ帰らなかったの？

メドヴェージェンコ (済まなそうに) どうしたらいいのさ？ 馬を出してくれないもの

！

マーシヤ (さも忌々しいまいまそうに、小声で) あんたみたいな人、見たくもないわ！

車椅子は、室内左手の中央でとまる。ポリーナ、マーシヤ、ドールン、そのそばに腰をおろす。メドヴェージェンコは悄しよげ気て、わきへしりぞく。

ドールン しかし、ここも変わったものですか！ 客間が書斎になってしまった。

マーシヤ トレープレフさんには、このほうがお仕事には都合がいいの。好きな時に庭へ出て、ものが考えられますものね。

## 夜番の拍子木の音。

ソーリン 妹はどこかな？

ドールン トリゴーリンを迎えに、停車場へね。もうじきお帰りでしょう。

ソーリン あんたが妹をわざわざ呼び寄せられたところをみると、わたしの病気は危ないというわけですな。（ちよつと黙つて）どうも妙な話だ、病気が危ないというのに、薬一服くれないんだからね。

ドールン じゃ、何がお望みなんです？ カノコ草の水薬ですか？ ソーダですか！ キニーネですか？

ソーリン ほらまた哲学だ。ああ、なんの因果だろう！（長椅子をあごでしゃくつて）

それ、わたしの寢床かね？

ポリーナ あなたのですわ、ソーリンさま。

ソーリン それは忝かたじけない。

ドールン（口ずさむ）「月は夜ぞらを渡りゆく」……

ソーリン わしはコースチャに、ひとつ小説の題材をやりたいよ。題は、こうつけるんだな——『なりたかった男』。つまり『ロナム・キ・ア・ヴーリュ』さ。若いころ、わたしは文学者になりたかった——が、なれなかつた。弁舌さわやかになりたかった——が、わたしの話しぶりときたら、いやはやひどいものだった。（自嘲的に）「とまあいった次第で、つまりそのありまして、そのう、ええと……」といったぎまでな、なんとか締めくくりをつけよう、つけようとして、大汗かいたものさ。家庭も持ちたかつた——が、持てなかつた。いつも都会で暮したかつた——が、それこうして、田舎で生涯を終わろうとしている、とまあいった次第でな。

ドールン 四等官になりたかつた——それは、なれた。

ソーリン （笑う）それは別に望んだわけじゃないが、ひとりでにそうなつた。

ドールン 六十二にもなつて人生に文句をつけるなんて、失礼ながら、——褒めた話じゃないですよ。

ソーリン なんと、わからず屋だ。生きたいと言っているのに！

ドールン それが浅はかというものです。自然律によって、一切の生は終りなからざるべからずですからね。

ソーリン それ、それが、腹いっぱい食った人の理屈さ。君はおなかがかくちいものだから、人生に冷淡で、どうなろうと平気なんだ。だが、いざ死ぬときにや、君だって怖こわくなるうさ。

ドールン 死の恐怖は——動物的恐怖ですよ。……それを抑おさえなければね。死を意識的に怖おそれるのは、永遠の生命を信じる人だけです。自分の罪ぶかさが怖くなるのです。ところがあなたは、まず第一に、不信心者ですね。第二に——どんな罪がおりですか？

あなたは二十五年、司法省に勤続された——だけのことだね。

ソーリン (笑う) 二十八年……

トレープレフ登場して、ソーリンの足もとの小さな腰掛にかける。マーシヤは終始彼から眼をはなさない。

ドールン われわれがこうしていちや、トレープレフ君の仕事の邪魔ですな。  
トレープレフ いや、かまいません。



問。

メドヴェーージェンコ　ちよつとお尋ねしますが、ドクトル、外国の町のうち、どこが一等お気に入りました？

ドールン　ジエノアですね。

トレープレフ　なぜジエノアなんです？

ドールン　あすこの街を歩いている群衆がすてきなんです。夕方、ホテルを出てみると、街いっぱい人波で埋まっている。その群衆にまじりこんで、なんとなくあちらこちらとふらついて、彼らと生活を共にし、彼らと心理的に融とけ合ううちに、まさしく世界に遍在する一つの靈魂といったものが、あり得ると信じるようになってきますね。つまりほら、いつか君の芝居でニーナさんが演じたあれみたいなね。ところで、ニーナさんは今どこでしょうね？　どこに、どうしているでしょうね？

トレープレフ　たぶん健在でしょう。

ドールン　僕の聞いたところでは、あの人は何かいわ曰くのある生活をしたそうだが、どういふことなのか？

トレープレフ それは、ドクトル、長い話ですよ。

ドールン それを君、てみじかにさ。(間)

トレープレフ あの人は家出をして、トリゴーリンといっしょになりました。これはご存じですね？

ドールン 知っています。

トレープレフ 赤んぼができる。その子が死ぬ。トリゴーリンはあの人に飽きて、もとのキズナへ帰ってゆく——とまあ、当然の経路をたどったわけです。もつとも、あの男はこれまでも、ついぞ元の女を棄<sup>す</sup>てた例<sup>ため</sup>しはないんで、ただ持ち前のぐらぐらな性格から、そここちでちよいと引っかけるだけでね。僕の耳にはいったところから判断すると、二ーナの私生活は全然失敗でしたよ。

ドールン 舞台のほうは？

トレープレフ どうやら、もつとひどいらしい。モスクワ郊外の別荘地の小屋で初舞台をふんで、それから地方へ回りました。そのころ僕は、いつもあの人から目を放さないでいて、しばらくは行く先々へついて回ったものです。大きな役ばかり引受けていました。演技はがさつで、味もそっけもなく、やたらに吼<sup>ほ</sup>え立てる、大<sup>おおぎよう</sup>仰な見得を切る、

といった調子でした。時たま、なかなか巧い悲鳴をあげたり、上手な死に方を見せたりしましたが、それも瞬間だけのことでね。

ドールン　すると、とにかく才能はあるんだな？

トレープレフ　そこはよくわかりませんでした。まあ、あるんでしょう。こつちじや顔を見てるんですが、向うでは僕に会いたがらず、宿へ訪ねてゆくと女中が通してくれないんです。あの人の気持はわかるので、僕もむりに会おうとはしませんでした。（間）さてと、まだ何を話したらいいのかな？ やがて僕がうちへ帰ってから、手紙が何通か来ましたつけ。聡明な、あたたかい、なかなかいい手紙でした。べつに愚痴をこぼしてはないのですが、これは並大抵の不仕合せじやないなと感じられるほど、一行一行、病的な神経が張りつめていました。頭の向きようも、ちよつと変なんです。何しろ署名が、「かもめ」というのですからね。『ルサルルカ』（訳注 『水の精』——プーシキンの物語詩。ダルゴムージスキのオペラがある）の水車屋のおやじは、自分は おおがらす 大 鴉 だと言ひ言ひしますが、あの人の手紙にも、自分は「かもめ」だと、のべつに書いてある。今あの人は、ここに来てますよ。

ドールン　来てるって、そりやまたどうして？

トレープレフ 町のね、はたご屋にいるんです。もう五日ほど、そこに泊ってる。僕も行ってみようと思ったんですが、このマーシャさんが訪ねてみたら、いっさい誰にも会わないということでした。メドヴェージェンコ君の話では、きのう夕方ちかく、ここから二キロほどの原っぱで、あの人に出あったそうです。

メドヴェージェンコ ええ、出あいました。あっち、つまり町のほうへ、歩いて行くところでした。僕が挨拶して、なぜ遊びに来ないのですと聞くと、そのうち行きますという返事でした。

トレープレフ 来るもんか。(間) 親父おやじさんも、ママ母も、てんから知らん顔で通します。それどころか、方々に見張りをおいて、一步も屋敷へ近づけない算段なんです。(ドクトルといつしよに、デスクのほうへ歩を移す) ねえドクトル、紙の上で哲学者になるのは易やさしいが、実際となるとじつに難むずかしいですね!

ソーリン チャーミングな娘だったがな。

ドールン え、なんです?

ソーリン チャーミングな子だった、と言うのさ。四等官ソーリン閣下までが、ひところあの子に惚ほれていたものな。

ドールン 老いたる女ロザレスたらし（訳注 リチャードソンの小説『クラリツサ・ハーロウ』の人物の名から）か。

シヤムラーエフの笑い声が聞える。

ポリーナ 皆さん停車場からお帰りのようですよ……

トレープレフ そう、ママの声もする。

アルカージナ、トリゴーリン、つづいてシヤムラーエフ登場。

シヤムラーエフ （はいりながら）われわれはみな、自然の暴威のもとに老いさらばえていきませんが、奥さんは相変らず、じつにお若いですなあ。……薄色の〔短〕うわぎ上衣を召して、さっそう颯爽としてらっしゃる。……典雅ですなあ……

アルカージナ ほらまた寝め立てて、鬼やに妬かせようとなさる、相変らずねえ！

トリゴーリン （ソーリンに）ご機嫌よう、ソーリンさん！ また何かご病気ですか？

いけませんなあ！（マーシヤを見て、嬉しうれそうに）やあ、マーシヤさん！

マーシヤ おわかりになつて？（彼の手を握る）

トリゴーリン 結婚しましたか？

マーシヤ もうとつくに。

トリゴーリン 幸福ですか？（ドールンやメドヴェージェンコと会えしやく釈をかわしたのち、ためらいがちにトレープレフのほうへ歩み寄る）アルカージナさんのお話だと、あなたはもう昔のことは水に流して、ご立腹もとけたそうです。

トレープレフ、彼に手をさし出す。

アルカージナ（息子に）ほら、トリゴーリンさんは、お前の新作の載っている雑誌を持ってきてくださったんだよ。

トレープレフ（雑誌を受けながら、トリゴーリンに）おそれいります、ご親切に。（腰をおろす）

トリゴーリン あんたの崇拜者たちから、宜よろしくとのことです。……ペテルブルグでもモ

スクワでも、概してあなたに興味をもっていて、僕はしよっちゅう、あんたのことを訊かれますよ。どんな人だの、年は幾つだの、ブリュネットかブロンドかだの、といったふうだね。みんな、どうしたわけか、あなたを年配の人のように思っている。それに誰ひとり、あんたの本名を知る者がいない。なにしろあんたは、いつもペンネームで発表するものだから。あんたは、あの『鉄仮面』（訳注 ルイ十四世の代にバスチーユで獄死した謎の人物。父デュマの小説などで有名）みたいに、神秘の人ですよ。

トレープレフ　ずっとご逗留ですか？

トリゴーリン　いや、あすはモスクワへ発とうと思っています。やむを得ません。中編ものを一つ急いで書きあげなければならんし、ほかにまだ、ある選集にも何かやる約束になっっているので、一口で言えば——相も変わらず、ですよ。

彼らが話している間に、アルカージナとポリーナは部屋の中央にカルタ机をすえ、左右の翼を上げる。シャムラーエフは蠟燭（訳注 複数）をともしたり、椅子を並べたりする。戸棚からロトー（訳注 Los 数字あわせの遊び。一から九〇まで

の数字を飛び飛びに記した盤を配っておき、一人が袋または筒から賽を一つずつ取

出しながらそこに刻まれた数字を言う。盤上の数字が先に埋まった人が勝ち）の箱が取出される。

トリゴリーン　せつかく来たのに、わるい天気につづかつたものだ。すさまじい風ですな。あす朝もしおさまったら、湖へ釣りに出ますよ。ついでにお庭と、そらあの場所——ね、覚えてますか——あなたの芝居をやったあすこを、検分しなければならぬ。モチーフは熟しているんですが、ただ現場の記憶を新たにする必要があるので。

マーシャ　（父親に）パパ、うちの人に馬を出してやってちょうだい！　うちへ帰らなくちゃならないんだから。

シャムラーエフ　（口まねをして）馬を……帰らなくちゃ……（厳格に）その眼で見たらう——今しがた停車場へ行つて来たばかりだ。そうそうこき使うわけにはいかん。

マーシャ　ほかの馬だつてあるじゃないの。（父親が黙っているのを見て、片手を振る）またけんかのたねね……

メドヴェージェンコ　マーシャ、ぼく歩いて帰るよ。いいからさ……

ポリーナ　（ため息をついて）歩いて、こんな天気……（カルタ机に向つて腰をおろす）



さ、どうぞ、皆さん。

メドヴェーージェンコ たかが六キロですからね。……（妻の手にキスをする）おやすみなさい、おつ母さん。（しゅうとはキスを受けるため渋々手を出す）僕はだれにも心配はかけたくないんですが、ただ赤んぼが……（一同に頭をさげる）おやすみなさい。……

（退場。さも申し訳なさそうな物腰）

シヤムラーエフ なんとか帰れるさ。將軍じやあるまいし。

ポリーナ （机をたたく）さ、いかが、皆さん。時間が無駄ですよ、ぐずぐずしてると、お夜食をしらせに來ますわ。

シヤムラーエフ、マーシヤ、ドールン、カルタ机につく。

アルカージナ （トリゴーリンに）秋の夜ながになると、ここではロトーをして遊ぶんですよ。ほらね、ずいぶん古いロトーでしょう。なにしろわたしたちが子供だったころ、亡くなった母がいつしよに遊んでくれた道具ですものねえ。お夜食まで、いつしよに一勝負なさらない？（トリゴーリンとともに席につく）つまらない遊びだけど、馴なれる

とこれで、悪くないものよ。（一同に三枚ずつ紙の盤をくばる）

トレープレフ （雑誌をめくりながら）自分の小説は読んでるくせに、僕のはページも切  
ってやしない。（雑誌をデスクに置き、左手のドアへ行きかける。母親のそばを通りか  
かって、その頭にキスする）

アルカージナ どう、お前も、コースチャ？

トレープレフ ご免なさい、なんだかしたくないんです。……ちよつと歩いてきます。

（退場）

アルカージナ 賭<sup>か</sup>け金は十コペイカよ。ドクトル、わたしの分、たて替えておいてちょう  
だい。

ドールン 承知しました。

マーシャ みなさん、お賭けになった？ じゃ始め。……二十二！

アルカージナ はい。

マーシャ 三！

ドールン はい。

マーシャ 三をお置きになつて？ 八！ 八十一！ 十！

シヤムラーエフ まあそう急ぐな。

アルカージナ わたし、ハリコフで受けた歓迎ぶりを思い出すと、今でも頭がくらくらするわ、皆さん！

マーシヤ 三十四！

舞台うらで、メランコリックなワルツのひびき。

アルカージナ 大学生が、お祭さわぎをしてくれてね……花籠はなかごが三つ、花束が二つ、そ

れからほら……（胸からブローチをはずして、机上に投げだす）

シヤムラーエフ なるほど、こりや大したものだ……

マーシヤ 五十！……

ドールン 五十きつかり？

アルカージナ わたしの舞台衣裳いしやうときたら、豪勢なものでしたよ。……なんといつても、

着付けにかけちゃ、わたしや負けませんからね。

ポリーナ コースチャが弾ひいている。気がふさぐのね。可哀かわいそうに。

シヤムラーエフ 新聞でひどく叩かれてるね。

マーシヤ 七十七！

アルカージナ 気にしないでいいのに。

トリゴーリン あの人はどうも運が向かない。未だに、ほんとの調子が出ないんですな。

何かこう変てこで、あいまいで、時によるとウワ言みたいなどころさえある。人物がさつぱり生きてない。

マーシヤ 十一。

アルカージナ (ソーリンをふり返つて) ペトルーシヤ、あなた退屈？ (間) 寝てるわ。

ドールン 四等官殿はおねんねだ。

マーシヤ 七！ 九十！

トリゴーリン わたしがもし、こんな湖畔の屋敷に住んだとしたら、とても物を書く気にはなりませんまいな。そんな欲望はうちやりにして、魚ばかり釣ってるでしょうよ。

マーシヤ 二十八！

トリゴーリン ボラやマスを釣りあげるのは——なんとも言えない気持ちだ！

ドールン しかし僕は、トレープレフ君を信じていますよ。何かがある！ 何かがある！

あの人はイメージでもって思索する。だから小説が絵画的で、鮮明で、僕は強烈な感じを受けますね。ただ惜しむらくは、あの人には、はつきりきまった問題がない。印象を生みはするが、それ以上に出ない。なにせ印象だけじゃ、大したことにはなりませんからね。アルカージナさん、作家の息子さんを持って、嬉しいでしょうな？

アルカージナ それがね、あなた、まだ読んだことがないの。ひまがなくてね。

マーシャ 二十六！

トレープレフ 静かに登場。自分のデスクへ行く。

シヤムラーエフ (トリゴーリンに) そうそう、トリゴーリンさん、あなたの物が残って  
いましたっけ。

トリゴーリン はてな？

シヤムラーエフ いつぞやトレープレフさんが射落したかもめ鷗ね。あれを剥製はくせいにして  
くれっ  
て、ご注文でしたか。

トリゴーリン 覚えがない。(しきりに考えながら) 覚えがないなあ！

マーシヤ 六十六！ 一！

トレープレフ （窓をパツとあけて、耳をすます）なんて暗いんだ！ なぜこう胸さわぎがするの、どうもわからん。

アルカージナ コースチャ、窓をおしめ、吹きこむじやないの。

トレープレフ、窓をしめる。

マーシヤ 八十八！

トリゴーリン はい、揃そろいました。

アルカージナ （うきうきして）うまい、うまい！

シヤムラーエフ ブラボー！

アルカージナ この人はね、いづどこへ行つても運がいいのよ。（立ちあがる）じゃあち

らで、何かちよつと頂きましょう。うちの有名な先生は、今日は夕飯ぬきでしたからね。お夜食のあとで、またやりましょう。（息子に）コースチャ、原稿はやめて、食堂へ行きましょう。

トレープレフ 欲しくないよ、ママ、おなかがいっぱいだから。

アルカージナ ご勝手に。(ソーリンをおこす) ペトルーシヤ、お夜食ですよ！ (シヤ

ムラーエフと腕を組む) 話してあげるわね、ハリコフでどんなに歓迎されたか……

ポリーナ、カルタ机の上の蠟燭を消してから、ドールンといっしょに椅子を押し  
行く。一同左手のドアから退場。舞台には、デスクに向ったトレープレフだけ残る。

トレープレフ (書きつづけようとして、今まで書いたところに目を走らせる) おれは口

ぐせみたいに、新形式、新形式と言ってきたが、今じゃそろそろ自分が、古い型へ落ち  
こんでゆくような気がする。(読む) 「<sup>へい</sup>堀のポスターに<sup>いわ</sup>曰く……。蒼<sup>あおしろ</sup>白い顔が、黒い

髪の毛にふちどられて……」曰く、ふちどられて……。ふん、なっちゃんない。(消す)  
いつそ主人公が、雨の音で目をさますところから始めて、あとはみんな切っちゃおう。

月夜の描写が長たらしく、凝りすぎている。トリゴーリンは、ちゃんと手がきまってい  
るから、楽なもんだ。……あいつなら、土手の上に割れた瓶<sup>びん</sup>のくびがきらきらして、水  
車の影が黒く落ちている——それでもう月夜ができあがってしまう。ところがおれは、

ふるえがちの光だとか、静かな星のまたたきだとか、しんとした匂やかな空気のかなかに消えてゆくピアノの遠音だとか……いや、こいつは堪らん。(間) そう、おれはだんだんわかりかけてきたが、問題は形式が古いの新しいのということじゃなくて、形式なんか念頭におかずに人間が書く、それなんだ。魂のなかから自由に流れ出すからこそ書く、ということなんだ。(デスクに最寄りの窓を、誰かが叩く) なんだろう？ (窓を覗く) なんにも見えない。……(ガラス戸をあけて、庭を見る) 誰か石段を駆けおりたな。(呼びかける) 誰だ、そこにいるのは？ (出てゆく。彼がテラスを足早に歩く音がする。半分間ほどして、ニーナを連れもどってくる) ニーナ！ ニーナ！

ニーナは頭を彼の胸におし当て、忍び音にむせび泣く。

トレープレフ (感動して) ニーナ！ ニーナ！ 君か……君だったのか……。僕は虫が知らしたのか、朝からずっと、胸がきりきりしてならなかった。(彼女の帽子と長外套をとってやる) ああ、僕の可愛い、大事なひとが帰ってきた！ 泣くのはよそう、泣くのは。



ニーナ 誰かいるわ。

トレープレフ 誰もいやしない。

ニーナ ドアの錠をおろして。はいってくと困るわ。

トレープレフ 誰も来やしない。

ニーナ 知ってるわ、アルカージナさんが来てること。だから閉めて……

トレープレフ (右手のドアの錠を<sup>かぎ</sup>かけ、左手のドアに歩み寄る) ここには錠前がない。

椅子<sup>いす</sup>でふさいでおこう。(ドアの前に肘<sup>ひじ</sup>かけ椅子を据える) さ、もう心配しないで、誰も来ないから。

ニーナ (彼の顔をじつと見つめる) ちよつと、お顔を見させて。(あたりを見回して)

暖かくて、いい気持。……あのころ、ここは客間だったのね。わたし、ひどく変ったかしら？

トレープレフ そう……だいぶ<sup>や</sup>痩せて、眼が大きくなつたな。ニーナ、こうして君を見ていると、なんだか不思議な気がする。どうしてあんなに、僕を寄せつけなかったの？

どうして今まで来なかったの？ 僕は知ってますよ、君がもう一週間ちかく、この土地にいることは。……僕は毎日、なんべんも君の宿まで行っては、君の窓の下に立ってい

た。乞食こじきみたいだね。

ニーナ あなたがさぞ、わたしを憎んでらっしやるだろうと、それが怖こわかったの。毎晩おなじ夢を見るのよ——それは、あなたがわたしを見ているくせに、わたしとは気がつかないの。この気持、知つてくださつたらねえ！ ここへ着いたその日から、わたしはあすこ……湖のへんを歩いていたの。お宅の近くにもたびたび来たけれど、はいる勇氣がなかつたわ。さ、坐すわりましょう。（ふたり腰をおろす）坐つて、思いつきり話しましう。ここはいいわ、ぽかぽかして、居心地がよくつて……。あの音は……風ね？ ツルゲーネフに、こういうところがあるわ、——「こんな晩に、うちの屋根の下にいる人は仕合せだ、暖かい片隅かたすみを持つ人は」わたしは、かもめ。……いいえ、それじゃない。（額をこする）何を言つてたんだっけ？ そう……ツルゲーネフね……「主しゅよ、ねがわくは、すべての寄辺よるべなき漂さすらい泊はびとを助けたまえ」……いいの、なんでもないの。（むせび泣く）

トレープレフ ニーナ、君はまた……ニーナ！

ニーナ いいの、これで楽になるわ。……わたし、もう二年も泣かなかつた。ゆうべおそく、こつそりお庭へはいつて、あのわたしたちの劇場が無事かどうか、見に行きました。

あれは、まだ立っていますわね。それを見たとき、二年ぶりで初めて泣いたの。すると胸が軽くなって、心の霧が晴れました。ほらね、わたしもう泣いていないわ。（彼の手をとる）で、こうして、あなたはもう作家なのね。……あなたは作家、わたしは——女優。お互いに、渦巻うずまきのなかへ巻きこまれてしまったのね。……あのころのわたしは、子供みたいにはしゃいで暮していたわ——あさ目がさめると、歌をうたいだす。あなたを恋してたり、名声を夢みたり。それが今じゃどう？ あしたは朝早く、三等に乗ってエレーツへ行くのよ……お百姓さんたちと合乗りでね。そしてエレーツじゃ、教育のある商人連中が、ちやほや付きまどつてくれるでしょうよ。むごいものだわ、生活って。

トレープレフ　なんだってエレーツへなんか？

ニーナ　この一冬、契約をしたの。もう帰らなければ。

トレープレフ　ニーナ、僕は君を呪のろいもし憎みもして、君の手紙や写真を破いてしまった。それでいて、僕の心は永久に君と結びついていると、毎分毎秒、意識していました。あなたへの恋が冷めるさなんて、僕にはできないことだ、ニーナ。あなたというものを失い、作品がぼつぼつ雑誌に載りだしてからこっち、人生は僕にとって堪えがたいものになった——受難の道になった。……自分の若さが急につみとられて、僕はこの世にもう九十

年も生きてきたような気がします。僕はあなたの名を呼んだり、あなたの歩いた地面に接吻せつぶんしたりしている。どこを向いても、きつとあなたの顔が見えるんだ。ぼくの生涯の一ばん楽しかった時代を照らしてくれた、あの優しい微笑がね。……

ニーナ（当惑して）なぜあんなことを言いだすのかしら。なぜあんなことを？

トレープレフ 僕はひとりぼっちだ。暖めてくれる誰の愛情もなく、まるで穴倉のなかのように寒いんです。だから何を書いても、みんなカサカサで、コチコチで、陰気くさい。ニーナ、お願いだ、このままいてください。でなけりや、僕もいつしよに行かせてください！

ニーナは手早く帽子と長外套を着ける。

トレープレフ どうして君は、ええニーナ？ 後生だ、ニーナ……（彼女が身じたくするのを眺める。間）

ニーナ 馬車が裏木戸のところ待たせてあるの。送ってこないで、わたし一人で行けるから……（涙声で）水をちょうだいな……

トレープレフ (コップの水を与える) 今からどこへ行くの？

ニーナ 町へ。(間) アルカージナさん、来てらっしゃるの？

トレープレフ そう。……この木曜、伯父さんの工合が変だったので、僕たちが電報で呼び寄せたんです。

ニーナ わたしの歩いた地面に接吻したなんて、なぜあんなことをおっしゃるの？ わたしなんか、殺されても文句はないのに。(テーブルにかがみこむ) すっかり、へとへとだわ！ 一息つきたいわ、一息！ (首をあげて) わたしは——かもめ。……いいえ、そうじゃない。わたしは——女優。そ、そうよ！ (アルカージナとトリゴーリンの笑い声を聞きつけて、じつと耳をすまし、それから左手のドアへ走り寄って、鍵穴からのぞく) あの人も来ている……(トレープレフのそばへ戻りながら) ふん、そう。……かまやしない。……そうよ。あの人は芝居というものを信用しないで、いつもわたしの夢を嘲笑<sup>ちやうしやう</sup>してばかりいた。それでわたしも、だんだん信念が失<sup>う</sup>せて、気落ちがしてしまったの。……そのうえ、恋の苦労だの、嫉妬<sup>しつと</sup>だの、赤ちやんのことでしょっちゅうびくびくしたりで……わたしはこせついた、つまらない女になってしまつて、でたらめな演技をしていたの。両手のもて扱い方も知らず、舞台上で立っていることもできず、声も

思うようにならなかつた。ひどい演技をやつてるなど自分で感じるときに心もち、とてもあなたにはわからないわ。わたしは——かもめ。いいえ、そうじゃない……。おぼえてらして、あなたは鷗かもめを射落うちおとしたわね？ ふとやつて来た男が、その娘を見て、退屈まぎれに、破滅させてしまった。……ちよつとした短編の題材……。これでもないわ。……（額をこする）何を話してたんだっけ？……そう、舞台のことだったわ。今じゃもうわたし、そんなふうじゃないの。……わたしはもう本物の女優なの。……わたしは楽しく、喜び勇んで役を演じて、舞台に出ると酔つたみたいになつて、自分はすばらしいと感じるの。今、こうしてここにいるあいだ、わたしはしょっちゅう歩き回つて、歩きながら考えるの。考えながら、わたしの精神力が日ましに伸びてゆくのを感じるの。……今じゃ、コースチャ、舞台に立つにしろ物を書くにしろ同じこと。わたしたちの仕事で大事なものは、名声とか光栄とか、わたしが空想していたものではなくつて、じつは忍耐力だということが、わたしにはわかつたの、得心が行つたの。おのれの十字架を負うすべを知り、ただ信ぜよ——だわ。わたしは信じているから、そう辛いつらこともないし、自分の使命を思うと、人生もこわくないわ。

トレープレフ（悲しそうに）君は自分の道を発見して、ちゃんと行く先を知っている。

だが僕は相変らず、妄想もうそつと幻影の混沌こんとんのなかをふらついで、一体それが誰に、なんのために必要なのかわからずにいる。僕は信念がもてず、何が自分の使命かということも、知らずにいるのだ。

ニーナ（きき耳を立てて）シツ。……わたし行くわ。ご機嫌よう。わたしが大女優になったら、見にいらしてちょうだいね。約束してくださる？ では今日は……（彼の手を握る）もう夜がふけたわ。わたしやつとこさで、立っているのよ。精も根も尽きてしまった、何か食べたいわ……

トレープレフ ゆっくりして行つて、夜食ぐらい出すから……

ニーナ いいえ、駄目……。送つてこないでね、ひとりで行けるから。……馬車はついそこんなんですもの。……じゃ、アルカージナさんはあの人を連れていらしたのね？ なあに、どうせ同じことだわ。……トリゴーリンに会つても、なんにも言わないでね。……わたし、あの人が好き。前よりももっと愛しているくらい。……ちよつとした短編の題材か。……好きだわ、愛してるわ、やるせないほど愛してるわ。もとはよかつたわねえ、コースチャ！ なんとという晴れやかな、暖かい、よろこばしい、清らかな生活だったでしょう。なんとという感情だったでしょう——優しい、すつきりした花のような感情。……

…おぼえてらつしやる? …… (暗誦する) 「人も、ライオンも、鷺も、雷鳥も、角を生やした鹿も、鷺鳥も、蜘蛛も、水に棲む無言の魚も、海に棲むヒトデも、人の眼に見えなかつた微生物も、——つまりは一切の生き物、生きとし生けるものは、悲しい循環をおえて、消え失せた。 ……もう、何千世紀というもの、地球は一つとして生き物を乗せず、あの哀れな月だけが、むなしく灯火をともしている。今は牧場に、寝ざめの鶴の啼く音も絶えた。菩提樹の林に、こがね虫の音ずれもない」 …… (発作的にトレープレフを抱いて、ガラス戸から走り出る)

トレープレフ (間をおいて) まずいな、誰かが庭でぶつかって、あとでママに言いつけると。ママは辛いだろうからな。 ……

二分間ほど、無言のまま原稿を全部やぶいて、デスクの下へほうりこむ。それから右手のドアをあけて退場。

ドールン (左手のドアを、うんうん押しあけながら) おかしいぞ。錠がおりてるのかな …… (はいつて、肘かけ椅子を元の場所におく) 障害物競走だ。



アルカージナ、ポリーナ、つづいてヤーコフは酒瓶さかびん（訳注 複数）をもち、それ  
にマーシャ、あとからシヤムラーエフ、トリゴーリン、それぞれ登場。

アルカージナ 赤ブドウと、トリゴーリンさんのあがるビールは、このテーブルに置いて  
ちようだいな。ロトーをしながら飲むんだからね。さ、坐りましょう、皆さん。

ポリーナ（ヤーコフに）すぐお茶を出しておくれ。（蠟燭ろうそく（訳注 複数）をともし、  
カルタ机に着席する）

シヤムラーエフ（トリゴーリンを戸棚のほうへひっぱって行く）そらこれが、さつきお  
話した品ですよ……（戸棚から鴉はくせいの剥製はくせいをとり出す）あなたのご注文で。

トリゴーリン（鴉を眺めながら）覚えがない！（小首をかしげて）覚えがないなあ！

右手の舞台うらで銃声。一同どきりとなる。

アルカージナ（おびえて）なんだろう？

ドールン なあに、なんでもない。きつと僕の薬カバンのなかで何か破裂したんでしよう。心配ありません。（右手のドアから退場して、半分間ほど戻ってくる）やっぱりそうでした。エーテルの壘びんが破裂したんです。（口ずさむ）「われふたたび、おんみの前に、恍惚こうごつとして立つ」……

アルカージナ （テーブルに向ってかけながら）ふっ、びっくりした。あの時のことを、つい思い出して……（両手で顔をおおう）眼のなが、暗くなっちゃった……

ドールン （雑誌をめくりながら、トリゴーリンに）これに二カ月ほど前、ある記事が載りましてね……アメリカ通信なんです、ちよつとあなたに伺いたいと思っていたのは、なかでもその……（トリゴーリンの胸に手をかけ、フットライトのほうへ連れてくる）……なにしろ僕は、その問題にすこぶる興味があるもので……（調子を低めて、小声で）どこかへアルカージナさんを連れて行ってください。じつは、トレープレフ君が、ピストル自殺をしたんです。……





## 青空文庫情報

底本：「かもめ・ワーニヤ伯父さん」新潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年9月25日発行

2004（平成16）年11月25日46刷改版

※楽譜は「世界文学大系」の「チェーホフ」筑摩書房、1958（昭和33）年12月5日からとりました。

入力：米田

校正：阿部哲也

2010年11月6日作成

2012年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# かもめ ЧАЙКА

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 ——喜劇 四幕——

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>